

東陽堂發賣地圖目錄

農務省地質調查所御編製

通信者請速屆郵船
 大日本鐵道線路圖 全二部
 定價 一圓七十五錢 送料六錢
 東陽堂發賣 圖書目錄郵
 大日本英君實測
 帝國臺灣地圖 折本全一部
 定價二十五錢 送料二錢

●百萬人 大日本帝國地質全圖 十五部 定價 金壹圓

無任立 折本 立軸 上軸 下軸 送料
 金五圓 金六圓 金七圓 金八圓 金九圓 金十圓 金十一圓 金十二圓 金十三圓 金十四圓 金十五圓 金十六圓 金十七圓 金十八圓 金十九圓 金二十圓 金二十一圓 金二十二圓 金二十三圓 金二十四圓 金二十五圓 金二十六圓 金二十七圓 金二十八圓 金二十九圓 金三十圓 金三十一圓 金三十二圓 金三十三圓 金三十四圓 金三十五圓 金三十六圓 金三十七圓 金三十八圓 金三十九圓 金四十圓 金四十一圓 金四十二圓 金四十三圓 金四十四圓 金四十五圓 金四十六圓 金四十七圓 金四十八圓 金四十九圓 金五十圓 金五十一圓 金五十二圓 金五十三圓 金五十四圓 金五十五圓 金五十六圓 金五十七圓 金五十八圓 金五十九圓 金六十圓 金六十一圓 金六十二圓 金六十三圓 金六十四圓 金六十五圓 金六十六圓 金六十七圓 金六十八圓 金六十九圓 金七十圓 金七十一圓 金七十二圓 金七十三圓 金七十四圓 金七十五圓 金七十六圓 金七十七圓 金七十八圓 金七十九圓 金八十圓 金八十一圓 金八十二圓 金八十三圓 金八十四圓 金八十五圓 金八十六圓 金八十七圓 金八十八圓 金八十九圓 金九十圓 金九十一圓 金九十二圓 金九十三圓 金九十四圓 金九十五圓 金九十六圓 金九十七圓 金九十八圓 金九十九圓 金一百圓 送料
 金壹圓 郵稅 金六錢

●百萬人 大日本帝國地質說明書 洋裝全一冊 定價 金壹圓六十錢 各小包二百枚ノ割

●百萬人 大日本帝國地質略圖 全四枚 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 十五部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 折本全一部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

●百萬人 大日本帝國地質全圖 五部各二部 定價 金壹圓

臨時 增刊 風俗畫報

本郷區之部 其二

明治四十年 十月廿五日 東陽堂發行

第三百七十三號

新撰東京名所圖會

第四九編

東陽堂發行明治四十年十月廿五日

第五十九編目次
○本郷區の部 其二

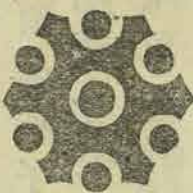
●本郷區の部 其二
●土溝町
●上野元町
●上野
●茗荷谷
●根岸
●根岸
●根岸
●根岸
●根岸

●本郷區の部 其三
●本郷區の部 其三
●本郷區の部 其三
●本郷區の部 其三
●本郷區の部 其三
●本郷區の部 其三
●本郷區の部 其三

●本郷區の部 其四
●本郷區の部 其四
●本郷區の部 其四
●本郷區の部 其四
●本郷區の部 其四
●本郷區の部 其四
●本郷區の部 其四

●本郷區の部 其五
●本郷區の部 其五
●本郷區の部 其五
●本郷區の部 其五
●本郷區の部 其五
●本郷區の部 其五
●本郷區の部 其五

基礎鞏固
經驗豊富



日本火災保險會社

一保險契約 現在高參億四千六百六拾萬圓
一資本金 參百萬圓
一積立金 壹百六拾七萬圓

取扱筒便
支拂迅速

一本社 東京市京橋區銀座一丁目 (電話 六三一、六六一、六六二、六六三、六六四、六六五)
二支店出張所 (大阪、京都、橫濱、神戸、名古屋、廣島、福岡、仙臺、函館、金澤、長崎、熊本)
一代辨店 内地 一千有個所
海外 英國、清國、天津、上海、漢口、牛莊、大連、旅順、安東縣、香港



此廣告を見御取引の方「風俗畫報」廣告に御附記を乞

東京日本橋區小舟町三丁目

株式會社 **第三銀行**

電話 浪花四四二番
浪花四五一番

預金利息

定期預金 以上 年五分

當座預金 付日歩 八厘

別口當座 同日歩 壹錢

全國送金無手数料

其他銀行一般の業務御便宜に取扱可
申候

東宮侍講 本居豐穎大人序 寫真版 六面入
款冬園 關谷可貞彌大人撰 銅版圖

天覽 人麿考

和裝美本 定價金壹圓貳拾錢 郵稅八錢

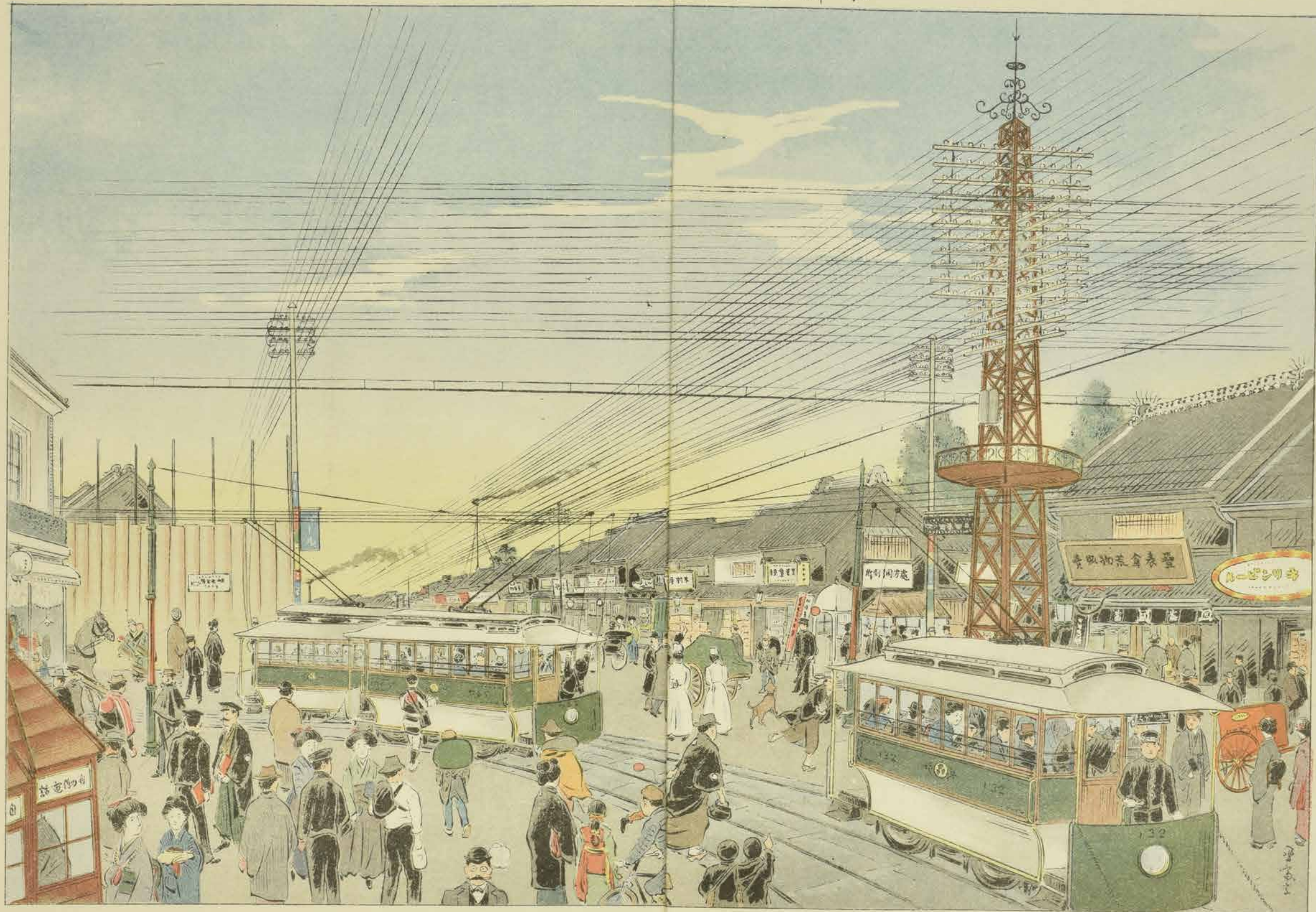
梯本朝臣人麿は歌を以て世に名高き人なれども其傳を委しく記せる書なし關谷先生夙にこれを遺憾とし博く諸書に稽へ精しく舊跡を温ねて大に得る所あり千古の疑團煥然氷釋し人麿傳茲に完成せりと謂べし本居先生此書に序して著者が年比深く心を盡し博く考へ渡されたる程知られて落る隈なく遺る憾も無きが如し又歌の論らひ詞の解釋など世人の未だ想到らざりし新説も見えていと珍らかなり斯道の爲に斯ばかり意を盡す人今世には類ひ多からじとこそ思はるれと云はれたる如く啻だ國史の遺漏を補ふに止まらず歌の講義古言の解釋など皆的確なる考證を擧て懇切に講說せられたり一たび此書を繙けば往昔の人に接して其言語人情風俗を親しく見聞するが如し人麿の事蹟を知らむと欲する人は勿論苟も歌道に志ある人は必ず一讀すべき無比の良書なり

東京市神田區通新石町三番地

發行所 **東陽堂**

電話本局九七〇番

本郷三丁目全四丁目目の圖



風俗新報 臨時増刊 新撰東京名所圖會第四十九編

○本郷區の部 其二

●本郷東竹町

○位置及地勢

本郷東竹町、西は本郷元町一丁目に隣り、北は西竹町と其一角東北隅に於て本郷一丁目及び湯島六丁目に接し、東は湯島六丁目に墾して、南は神田川に臨めり、地勢高燥にして、南の方稍低下せん。番地は一より三十七に至る。

○町名の起原並に沿革

本郷東竹町及び西竹町は、昔時舊幕府の小人組などに給ひし受領町屋敷なり。

府内備考(三十二)に云、町名起立の譯、確と相分不申候へども元祿の末の頃、竹本商人多分御座候に付、竹屋町と相唱申候由に御座候、其後竹町と相唱候儀年月相知不申候、尤町内竹屋彌兵衛と申者、身元相應の者にて、竹商賣手廣に仕、向側同朋町元白山社地跡に寛永年中より住居仕罷在候處、文祿三辰年中退轉仕候、當町の儀は御目付方御支配御小人大繩拜領町屋敷に御座候て、御入國後參州より御供仕候者、年月不知、三河附駿河臺にて拜領仕候處、元和三巳年御用地に相成當時の地所へ替地被下置候。

明治二年、之を東西に分ち、東竹町、西竹町と稱す、されど

同書に云、里俗南の方町屋敷に寄候町屋を東竹町と相唱、西寄候町家を西竹町と相唱申候。

と見え、舊慣名なりしが、是に於て公稱せられしなり、當時近傍の土地をも此町に合併せり。

概ね市店なり、又學校及び小邸宅あり、十四番地に寄席あり、若竹亭といふ、廿五番地に京華中學校、同商業學校、三十四番地に東京裁縫女學校あり。

●京華中學校 京華商業學校

京華中學校及び京華商業學校は、本郷東竹町二十五番地にあり、京華中學校は明治卅年六月文部省令尋常中學校設備規則に據りて本郷龍岡町三十六番地(勤工場前同地)に之を設置するの出願を爲し、同七月九日其認可を得たり、校長男爵津田眞道、主幹磯江潤、九月三日開校式を擧ぐ、生徒三百十六名、三十一年一月第一高等學校を首め、其他の各高等學校、東京郵便電信學校、東京美術學校との聯絡認可を得、同年七月九日本校創立紀念日に當り、本校々友會を組織して、其第一回總會を神田錦輝館に擧げたり、同年十月東京工業學校より、卅二年一月商船學校及び高等商業學校より聯絡の認可を得、全く府縣立中學校卒業生と同等の取扱を受くるに至れり、同年三月十三日本校々舎新築地を現今の地に購入せり、同年十二月校舎新築工事に着手し、三十三年五月一日新築舎上棟式を擧げ、二十六日之に移轉し、六月一日より各級を十五組に分ち授業を始めた、當時生徒控室、理化博物教室等の工事未だ全く竣らざるを以て、頗る諸般の不自由を感せり、同年九月新築工事漸く成るを告げ、九日新築舎落成式を擧ぐるを得たり、三十六年九月三日校長男爵津田眞道逝去、磯江主幹校長となる。

私立京華商業學校は明治三十四年文部省實業學校令に據り、本郷區東竹町二十五番地に設置の件を出願し、十二月十八日告示第二十九號を以て、商業學校規程甲種程度として文部大臣より認可せらる、三十五年五月一日入學生百二十五名を三學級に養成して授業を開始せり、校長前田正名、三十六年學年を變更し

て毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日を以て終ること、せり、而して生徒總數二百四十五名に達し、本科二年一組、本科一年二組、豫科二年二組、豫科一年二組を設くるに至れり、校長前田正名は名譽校長となり、主幹磯江潤校長となりて専ら其任に當る、爾來校運益々隆盛となれり、三十七年四月級數並に組數に於て更に一を増し、生徒總數三百三十九名を算するに至れり、九月十四日文部大臣より本科豫科の全部を通じて徴兵令第十三條に依り認定せらる、三十八年四月九日第一回卒業式を舉行し、卒業生二十四名を出せり、同専攻科第一年を設置し、本校卒業生並に他商業學校卒業生の尙進んで深遠なる商業學科を習得する所たらしめ、本科二年に於ても更に二組を増し、生徒總數五百三十六名を收容せり。

東京裁縫女學校

東京裁縫女學校は東竹町にあり、其地域三十四、五番地に跨がる、通稱渡邊女學校といへり、前校長渡邊辰五郎の専ら經營に成るものとす、是より先き明治十四年地を湯島四丁目三番地にトして私塾を開き、同十七年まで繼續せり、同年東竹町二十五番地に移轉し、和洋裁縫傳習所と稱して同二十五年まで繼續せり當時の教授科目は和洋裁縫、禮法、點茶、生花、造花、刺繡の六科なりき、同年東京裁縫女學校と改稱し、教授科目中に修身、家事、教育、習字の四科を加へたり、三十二年方今の地即ち東竹町三十四五番地なる本郷教會(基督敎の會堂にして春木町の火災に類焼し、當時煉瓦造の建屋)を購入し、改築して此所に移り、教授科目中更に編物、英語、國語、算術の四科を加へ、造花の二科を廢す、三十二年渡邊氏の息、滋、歐米服裝研究の爲め米國へ留學、シカゴ市チヤールズ、ジェーストーン裁縫學校及びマクダウエル裁縫學校に入學せり、三十五年一月第一回教員養成會を開き、教育、家

政、算術、裁縫教授法、國語の五科目に就て六箇月間講習す、同年渡邊滋、業を卒へて米國を發し英佛瑞伊獨白の諸國を巡歴して同年九月歸朝し、十月より洋服裁縫科を擔任教授す、是れ本邦に於ける歐米式教授の嚆矢なりとす、三十六年二月校歌成る、左の如し。

第一章

文よむわざは
をみなとしては
その針仕事を
この渡邊の
第二章

直なる道を
系まきのいと
この渡邊の
教への庭に

とるものさしの
みなたどれかし
つとめよや乙女子

三十七年三月規則を改正して、本科の科目中に家政を必須科として加へたり、四月住宅の一部を取壊して三階の教室とせり、三十八年二月第五回教員養成會を開く、五箇月修業とし教育、國語、裁縫科理論、裁縫教授法、家政の五科目とす、三十九年四月より教員志望者の爲め師範科を設くることとし、三十九年三月規則を改正せり、即ち本科、普通科、高等科及師範科を置き、修業年限は本科二箇年、普通科高等科及師範科各一箇年とし、授業料は一箇月本科壹圓、普通科壹圓五拾錢、高等科師範科各貳圓、受験科入學料各壹圓と定め、寄宿費金七圓とす、現在の校舍は三階達にて總建坪數六百八十九坪五合を有す、生徒定員一千名、校長は前記の渡邊滋。

月同窓會員等有志者の建つる所とす、又校内に圖書館の設あり三十七年六月の新設にして、同七月四日を以て開館す、當時圖書七百部、參考品五百點を藏せり。

若竹亭

寄席若竹亭は、東竹町十四番地にあり、色物席にして、毎月前半を落語とし、後半を義太夫と定む、市内有数の席亭にして、構造堅牢、定員八百名、定連あり、客種は學生官吏會社員に多し、營業主佐原東吉といふ、もと岩竹と稱し、後ち今の名に改むと、電話下谷一七四三番。

本郷西竹町

本郷西竹町、西は本郷元町一、二丁目に隣り、北は本郷二丁目と同一丁目に接し、東と南は東竹町に包まれて、西南の一角、元町一丁目に接したり、地勢元町につき高燥平坦なり、番地の區劃、東竹町に同じ、即ち一番地より三十七番地に至る。

町名の起原並に沿革
前記東竹町の條に之を説けり。

景況

町内西の方、一區域(自十七番地至三十一番地)は、給水工場用地となりて、其餘地に圍む込れ、其餘は概ね市廛と化せるも、所謂裏町なれば、到底商業の地にあらず。

本郷元町

位置及地勢

本郷元町、北は本郷弓町に隣り、東は本郷二丁目と本郷西竹町東竹町と互に其境界を交へ、南は神田川に臨み、西は小石川區と界し、其小石川面に面せり、地勢丘陵を成し、高燥平坦なりと雖も、西の方小石川區に面する所、俄然として低下せり、町

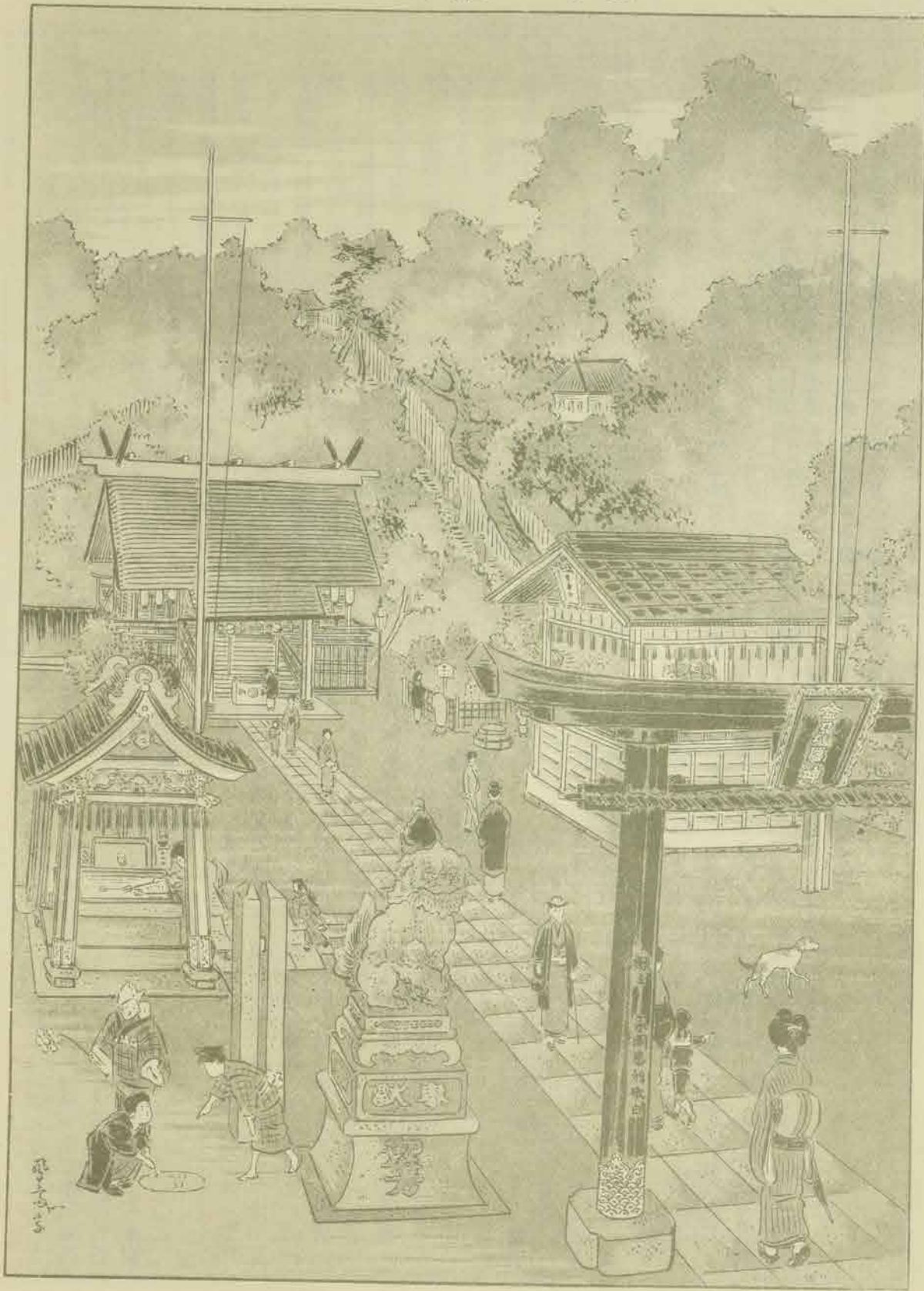
内を區劃して、一丁目二丁目となし、番地を左の如く區劃す。

一丁目自一番地至七十九番地
二丁目自一番地至七十七番地

町名の起原並沿革

本郷元町は、舊幕府の頃、中間組などの受領町屋敷なり、始め此邊地割の時、第一に割渡せしを以て、元町と名づくこと。府内備考(二十三)當町の書上に云、町名起立の儀、駿と相分不申候へども、町内の儀は御中間大繩拜領屋敷にて、御入國の節、三州より御供仕候者、慶長十巳年中、三河町駿河臺邊にて拜領地八町四方被下置、其頃は當所より神田川河岸の邊一圓御弓同心御組屋敷に候處、年月不知、右御組屋敷小石川大塚邊に引拂、右跡に元和四年七月中前書三河町駿河臺より引替拜領有之候處、其後元祿八亥年九月中御中間頭衆より町屋敷に致度段被相願候由にて、翌九子年二月中御奉行能勢出雲守藤川口攝津守様御勤役中、新規町屋御免有之候由、然る處元祿十六未年二月中御用地に被召上河岸の方五十間通跡へ引退、當時の場所元坪之通替地被下置候由、尤右替地の所明地に候哉、何れも立跡に候哉相分り不申候、其後年月不相知右引跡河岸は御武家地に相渡、右之通度々沿革致候儀にて、右場所往古は豊島郡岐田領本郷村と申傳候、且町名の儀は町家に不被仰付以前、神田川河岸通へ引地に相成候節、本郷邊拜領地の内にて、其外地面より右場所は早く御地渡有之候故、本郷元町と唱來候に付、町屋に被仰付候節、直に右町名相傳來候儀に可有之趣申傳に御座候。

町内の儀五六十箇年程以前(明和安永の頃)迄は四箇町に相分一丁目二丁目三丁目四丁目と私に相唱候由の處、いつとなく元町と計相唱、尤右故當時も上町と唱候場所は一丁目二丁目



分、下町と鳴候場所は二丁目四丁目分に御座候。元町と稱し、町内を劃して私に上町下町と呼ぶしが、明治二年之を二箇町に分ち、一丁目、二丁目とし、同五年松平氏邸(高松)を二丁目に、青山氏邸址及土地を三丁目に合併す。

◎景況

弓町に面するの地は、壹岐坂より本郷二丁目大横町に達する通街にして、商家櫛比す、町内商家邸宅相半せり、一丁目には伯爵松平頼聰(一番地)、伯爵杉茂憲(七番地)、中野武營(五番地)邸及び耳科醫院(二番地)あり、東の方一二丁目の境界線にして西竹町と相交錯する所、給水工場として用せられ、南の方神田川に臨む所、外濠線電車を通ず、元町停留場あり、二丁目には昌清寺(十五番地)、興安寺(十七番地)等正寺(十九番地)、三念寺(二十八番地)各寺院あり、下宿屋多し、小石川町に面するの地は水道橋白山間の通街にして、市區改正道路取擡げ電車線路工中なり。

●油坂

元町二丁目と東竹町邊の間を南に下る坂あり油坂と呼ぶ。油坂の北にありて、東に上ると富士見坂といふ。富士山の眺望に適す。

●富士見坂

富士見坂の北にある坂を建部坂といふ。幕土建部氏の邸地あり因て此名に呼び做せり。

●建部坂

元町二丁目と弓町二丁目との間を西へ水道橋通、砲兵工廠東通門前を下る坂あり、壹岐坂又壹岐殿坂と云ふ。

●壹岐坂

府内備考(三十二)に云、壹岐坂は御弓町へのぼるの坂なり、

彦坂壹岐守屋敷ありしゆゑ名なりといふ、案に元和年中の本郷の圖を見るに、此坂の右の方に小笠原壹岐守下屋敷ありて吉祥寺に隣れり、おそらくは此小笠原よりかこりし名なるべし(戸志)。

水道橋方面、砲兵工廠側より本郷大横町に出づる通街にして、往來頻繁なり。

●本郷給水工場

東京市本郷給水工場は、本郷元町一丁目、同二丁目及び西竹町に跨りて、正方形の一區劃をなせり、本工場は明治二十六年二月、民屋を取拂ひ、其築造に着手し、同三十二年十二月落成せり、場内に圍まれたる番地の數は左の如し。

本郷元町一丁目 自廿七番地 至六十九番地

同 二丁目 自一七番地 至三十九番地

本郷西竹町 自一七番地 至卅一番地

本工場は淀橋なる淨水工場より淨水の分送を受けて總町、牛込、小石川、本郷、神田、下谷、淺草、本所の各區に給水す、電話下谷一五八二番。

●金刀比羅神社

金刀比羅神社は元町一丁目一番地、子爵松平家邸内に鎮座、祭神は大物主神なり、社記に云。寛政五丑年十月舊高松藩主從四位松平頼儀(高松)萬石、小石川邸内(武藏上野郡小石川御門内大手より十九町と稱せり)方守甲武線飯田町停車場の邊へ創立、幕府に乞ふて諸人の參詣を許したり。

東郷歳事記春の部に云、十日(毎月)金毘羅參、小石川御門内高松家御藩邸十日と見ゆ。

其後明治四年十一月本郷元町二丁目七十四番地(今の一番地)同邸内へ遷座あり、明治十年五月二十二日附出願許可の上、以後共有社として維持し來る、境内元四百四十坪六合餘ありしが

三十八年東京市區改正道路取擴げの爲め境内地の表通を徵收され、且又松平家所有地なるを以て社後の空地若干取圍みたるより、移轉の當時に比すれば聊か坪數減じ居れり。

本社奥行二間 幣殿奥行九尺 拜殿奥行三間 神樂殿奥行三間
額殿奥行二間 手水屋四方

大祭は十月十日にして、中祭四月十日小祭は毎月十日なり。當日神樂を執行す。

○吉祥寺跡

駒込吉祥寺は、明曆火災前、水道橋外にあり、水道橋もと吉祥寺橋といへり。吉祥寺退轉の後、橋の名も改まれり。

府内備考三十二に云、吉祥寺跡は水道橋の外、本郷と小石川の境なるべし、今の石川、石丸、建部氏等の屋敷などすべてその舊跡にや、この寺に藏する天正のころの文書には神田の臺とあり、このころすべて此邊を神田といひしにや、元和年中の本郷の圖を見るに、水道橋の外に吉祥寺ありて、よほど廣きさまなり、東の方は大岡源右衛門が組のものをれり、北は小笠原壹岐守が下屋敷なり、西南には道をおへり、又寛文年中本郷臺の圖といへるものを見るに、吉祥寺はすべて松平紀伊守、曾我伊賀守、石丸石見守、安藤九郎左衛門の屋敷とす、吉祥寺は明曆三年の回祿の後、駒込へうつりしなり、曾我の家譜を見るに、萬治四年辛丑六月十二日吉祥寺明地水道橋の角にて屋敷を賜へりなどあれば、この頃より旗下の士に給ひしことしるべし、寛文の江戸圖年十一に曾我伊賀守屋敷のよししるすは、今の石川氏の屋敷なり(按に今の建部氏の屋敷の内には吉祥寺ありし頃よりの木)

即ち吉祥寺址は、今の元町一丁目一番地より三番地まで其舊地なるべく、小石川砲兵工廠(舊水戸邸)の一角も之に加はりしなるべし。

○初音の藪

初音の藪といへるは、お茶の水の邊なり、府内備考三十二に云、初音藪は、その所を詳にせず、或云櫻馬場の西の方なりと、元祿の頃御成の時、此ほとりを通御ありしに、をりし藪の内にて鶯の初音を聞せられ、此所を初音の藪と名付べしと台命ありしよりの名なりと(改撰)江戸志今土人は御茶の水建部六右衛門屋敷の岸付の所ならんと云(本郷元江戶圖註)に初音の森はお茶の水より元町邊時鳥の名どころとす、府内にては此邊の茂み一聲早しと、是は前説の鶯の事を誤り傳へしものにや、別に初音の森といへるを未だ聞ず。櫻の馬場といへるは、今の湯島高等師範學校の邊にして、建部六右衛門屋敷は元町一丁目三番地なり。

○土木課水道橋出張所

東京市土木課水道橋出張所は、元町一丁目水道橋の袂にあり、もと高松藩邸門前の廣場にて、火除地なり、賣卜者、露店商人など見懸けしが、市區改正前、此地に土木課出張所を建設し、道並より少しく引込みて、板塀に圍まれしが、市區改正道路の取擴げと共に、自から道路に平行し、廣場の址、松平家の正門前の通路を有するのみにて、漸く見分け難し、同所は土木課員の出張所にして、技手以下人夫常に出入す、又水道事務を扱へり。

○水道橋 水賣

在來の水道橋(元吉祥寺橋といへり)の西に、鐵橋架設中なり、市區改正の新道路神田一ツ橋通りより來りて小石川白山に通ず、即ち橋南に於て三崎神社々地を取拂ひ、橋北に於て市兵衛河岸の民家を除き、工事漸く進涉せり、此地やがて電車の十字街とな

るべし、又木橋の北詰西側に舊上水の排水あり、以て神田川に注げり、給水法、未だ普及せざりし日、元町邊水質不良、飲料に適せず、擔夫あり桶を肩にして此の剩水を汲み取り、一荷何錢と價を定めて鬻げり、水道落成の後此事止みぬ。

●お茶の水の舊懸樋

元町の河岸より南の方駿河臺の中腹を貫きて、神田上水の懸樋を渡す、お茶の水の萬年樋と稱し尤も著名なりしが、新水道敷設以來廢樋となり、毀撤せらるる(神田區の部お茶の水の條に詳し)其昔上水番屋並に雪且が借樓せりといへる、蒲燒舖神田川(屋)皆元町側に在りしなり、郭公の名所、將た小赤壁と賦せられしお茶の水の斷崖すら、甲武電車の軌道通じ、元町の河岸には外濠線電車、東行西走、房午織るが如く、近年に至り其儂を一變せり。

●三河稻荷神社

無格社三河稻荷神社は、本郷元町二丁目六十番地に鎮座す、祭神は宇迦魂命なり、淨土宗昌清寺元と之が別當たり。新編江戸志(三)に云、正一位三河稻荷社、社傳云、抑當社は其もと三州碧海郡上野庄稻荷山隣松寺の鎮守なり、神祖三州御在城の時、御陣場の守護神なり、依之御開運の後、神領三十石、山林境内に相添て御寄附、其外御太刀御兜等奉納あり天正年中御入國の時、御譜代御仲間の面々神詔を蒙りて氏神となし、組屋敷の内に社を造營す、其後駿河臺へ所を移され慶長十一丙午年當寺境内に移し、組中の氏神と尊敬し奉る、靈驗言葉に盡し難し、享保十六年辛亥二月中氏子中志をつくし、正一位に叙位し給ふなり、寛永二酉年七月十九日の類焼に、縁起等焼失すとあり。

慶長以來、町内の鎮守として、昌清寺中(今の二丁目)に祭祀しありしを、明治二年神佛混淆の禁令に遇ひ、昌清寺と分離して、

別に同町二丁目三番地に遷座し、約二百坪の地を以て其社地と定めたり、明治二十六年同所が本郷給水工場敷地として使用せらるゝに及び、民家と共に取拂はれ、同年方今の地に轉ず、本社拜殿前に神樂殿の再營あり、廣前の狛犬(天明)嗽石盤(嘉永)を移置し、五月花崗石の鳥居を建て、翌年石燈籠一對寄進あり、境内の設備漸く整ふ、三十三年六月有志醸金して前面に鐵の玉垣を造る、氏子は元と二丁目二丁目を通じて元町全部之に加はり居りしも、一丁目の地は其後湯島神社に屬し、今や二丁目に限らる、大祭は毎年六月一日二日の兩日なり、根津神社の受持にして、社掌は横山善和といへり、十三代繼承すと。

●各寺院

●昌清寺 元町二丁目十五番地にあり、嶺松山弘願院と號す、淨土宗京都恩院の末派なり、元和元年創建す、本尊阿彌陀如來は駿河大納言忠長の護念佛なりといふ。新編江戸志(三)に云、開山天蓮社龍譽上人冷吟和尚、寛永十四年三月七日に寂す、寺傳云、本尊阿彌陀聖德太子作終りの尊像、御細工道具尊像の胎中に入り、當寺御入國前にわつかの草菴あり、或時武者一人俵の中へ尊像を入、持來りて草菴に預ける、其後年經ても彼武士來る事なし、依之當寺の本尊とす、はるかに年月を経て駿河亞相公の御乳女の者此草菴に來り住し、亞相公御菩提の爲に終に一字を造立す、則當寺なり、かの人の法名に昌清院殿心譽妙安大姉といふ、依之後に昌清寺と名づくことあり。

●興安寺 同十七番地にあり、青柳山と號す、眞宗本派本願寺末開山宗心、元和三年起立。

●等正寺 同十九番地にあり、應供山と號す、又本派本願寺末、開山玄澄、元和八年起立、春日作阿彌陀如來を安置す。

●三念寺 同二十八番地にあり、藥王山遍照院と號す、新義眞言宗彌勒寺末なり、開山を品隆といふ、現住藤波元榮は其第廿一世に當れり。

略縁起云、文明年中一人の修行者あり、一字の草堂を結び、遍照院と號す、本尊は慈覺大師の眞作なり、大日如來安置し恭敬す、爰に當院の藥師如來は往古惠心僧都母公病氣の爲に彫刻し給ふ靈像なり、上足の弟子慶裕阿闍梨此尊像を奉事す年月漸く轉じ、遠州風來寺にうつり、慶長年中武藏安靜の時武家某氏尊像ならびに傳記を傳來し此所に安置す、即ち堂舎を建て醫王山三念寺と號す。

寺門南に面す、「藥王山」三字の額を扁す、門内右に土藏造の本堂あり、本尊大日如來、阿彌陀如來、地藏菩提を左右厨子の裏には弘法興教二大師を崇敬す、堂内右の一隅に閻魔王あり、藥師堂は本堂に對し、藥師佛を安置す、又當寺は府内大師第三十四番の札所あり。

●代用習性高等小學校

習性小學校は壹岐坂上、元町二丁目六十番地にあり、舊幕臣小山正路、同席太郎父子の經營に成り、明治十四年十月下谷練堀町に創設し、小山小學校と稱せり、翌年本郷區弓町一丁目に移轉し、習性小學校と改稱す、其頃は木造平家建二十坪、教室二箇を有するに過ぎざりしなり、十六年校舍狹隘を告げ、十二坪の増築あり、十八年五月中等科を併置す、是より先き初等科のみ授業せしなり、十九年十二月布令に基き尋常科、高等科と改め、其認可を得たり、當時尋常科生徒五十五名、高等科四十名ありたり、二十年八月寺子屋風の天神机を改めて高脚机を用う、區内の私立學校にて天神机を廢せしもの、本校を以て其嚆矢となす、爾來市立小學校と並びて進歩の端緒を啓けり、二十一

年六月方今の地へ移る、校舍木造二階建とし、敷地二百六坪餘教室四十三坪五合、此室數六箇、外に教員控所一箇、體操場百五十二坪三勺あり、三十六年七月三十一日區内代用小學校と定められ、繼續して今日に至る、三十七年八月校舍改築あり、現在敷地二百三十四坪餘、校舍九十一坪七合、教室九箇、尋常科六學級、高等科三學級を置き、教員九名、外に裁縫教師一名、生徒尋常科三百八十五名、高等科百五十一名(十月一日調査)あり、校長は前記の小山庸太郎とす、家族制度にて兄弟姉妹協力之に従事し、進歩發展を期せり、他より招聘せる教員五名あるに過ぎず。

●本郷弓町

◎位置及地勢

本郷弓町は東西に延張せる市街にして、之を一丁目、二丁目に區劃せり。

一丁目は東方總て同町二丁目に對し、西方は小石川區に界し、南は本郷元町二丁目の一部に面し、北は本郷眞砂町に向ふ。道路周通し又其の中央並に東西をも貫通せり、地區の番號は一より二十九に至る。其の北面即ち十二、十三、十四番地及び二十六番地の一角は、新設の電車線路に臨めり。

二丁目東方は本郷二丁目、三丁目の背後を承け、西方は當町一丁目に面し、南は本郷元町二丁目の一部に對し、北は電車線路新設の大路を隔て、本郷眞砂町の一部に臨めり、道路四周し一路南北を貫き、東南隅の三番地にも二條の小路あり、而して北西隅には眞砂町の十五番地割據しあり、地區の番號は一より三十四に至る。

其の地勢は一丁目の西隅のみ坂下に在りて低く、其の以東は渾て高地なり。

◎町名の起原並沿革

本郷弓町は、慶長、元和の頃、弓同心の組屋敷とし、毎日的場に於て射を習はしめしより、里俗に御弓町と呼び來れり。明治五年に至り御の字を去りて今の名と爲す。

府内備考にいふ。御弓町舊事若話云。慶長、元和の頃この所に御弓組の與方同心六組をおかせられ、毎日的場に出で弓を射せしむ。此ところは御城より鬼門にあたるが故なりと。その後寛永年中鬼門の方に寛永寺を御建立ありて、この御弓組も目白の臺水屋敷といふ地にうつさる。されば今に御弓町の名はのこれりと。按に元和年中本郷臺の圖といへるものに、(或云平保の圖なりと)御先手組六組ありて、他の者の屋敷は見へず、たゞ大岡源右衛門同心山田庄右衛門與方といふあり是は御小人頭をいふなるべし。御先手にはあらず。寛文年中の本郷臺の圖には、御先手組四組その外旗本の士の屋敷も見へたり。延寶の江戸圖にも、御弓組四組ほど此所にありしよしのすれば、寛永年中にみなうつされしといふはおぼつかなし。たゞその頃二組をまづ他の地へうつされ、延寶の後又二組を目白の臺へうつされしにや。此時四谷などへもうつされしと見ゆ。又新見隨筆に云。むかしは本郷御弓町には與方同心ばかりの屋敷なりしが、元祿の頃その屋敷は收公せられ、御旗本の屋敷に下されしことなり。按にこの説もまたうけがひかたし。或人云。天和二年四月この地を御小人御中間などに給へり、その頃の老人のかたりしを傳ふるに、屋敷をたまたわらざりし前は、ことごとく原にて、その間ごとくかしこに古き井の跡ありしを、これ御弓組與方などのよりし故なるべしと。是によればいづれ延寶、天和の間うつされしと見へし改選江戸志今御弓町と稱する所は、本郷二町目三町目の西裏

より、東富坂邊までの總名にして、町名にはあらず。明治五年前當地は武家地なるを以て、公然たる町名なく、只里俗に御弓町と呼びしことを證すべし。故に町繼等には之を載せず。

◎景況

當町はもと武家地なるを以て、紳士等の住宅多し。北方大路の沿邊は市賑備比し、近頃は最も繁昌せり。一丁目六番地には榎原政敬子爵、同十六番地には松平定晴子爵の邸宅あり。八番地には成功雜誌社(村上俊藏)と高等寄宿業本郷館、十二番地に鐵道小荷物等の取扱所。十八番地に醫師後藤省吾、二十五番地に華陽館、二十六番地に信濃館の下宿業、二十一番地にやまと女塾(伊庭久仁)あり。當町にて最も奇觀なるは、二番地に上宮教會と本郷會堂と數歩を隔て、並び居ると、二十五番地に表に幕を張り天之親大神と題し祈禱禁厭を業とせる石川カヨの居宅なりとす。二丁目一番地には前田利隠子爵の邸、女子美術學校、十番地に木材雜貨商潮見一平、二十三番地に醫師橋本左武郎、三十四番地に古市公威、青山胤通博士の邸あり。

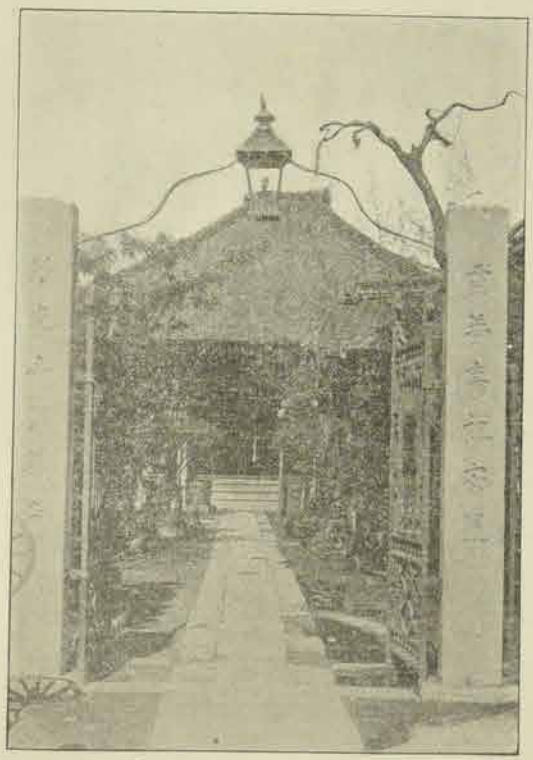
●穀豐稻荷神社

穀豐稻荷神社は、弓町二丁目二十五番地に在り。石の鳥居ありて、正一位穀豐稻荷と題せし舊額を掲ぐ、同石柱に文化元年甲子と刻しあれば、當社は其の頃の建設ならむか。祠宇は赤色に塗りたるものにて大ならず。内に金字の聯板あれども、其の歌明了に讀むことを得ざりし。

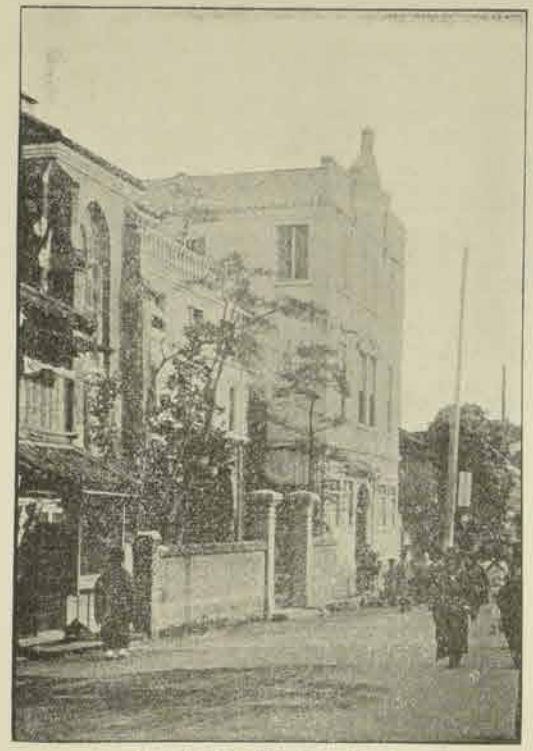
●老楠樹



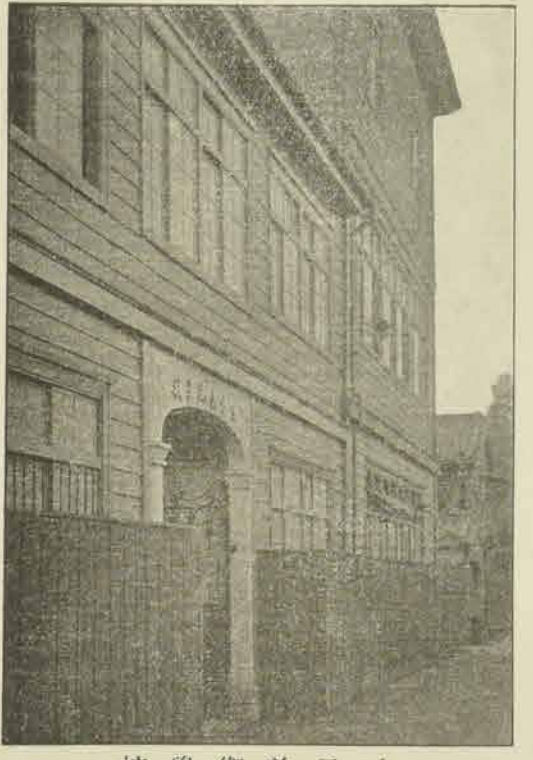
三河稻荷神社



興善寺



東京裁縫女學校



女子美術學校

(坪川辰雄撮影)

弓町一丁目八番地の前を過る者は、何人も其の門内に注連を結びし老楠樹あるを見るべし、一丈餘の上より三幹に分れ、根株の大ききは三圍許あり。同邸には楠正啓氏住せり、但江戸繪圖には楠氏は見えす。此老楠樹と關係あるにあらざるか、記者は多忙なりしを以て之を聞漏らしたるは遺憾なり。

女子美術學校

女子美術學校は本郷弓町二丁目一番地に在り、木造二階建にして入口は北に面し、前田家の邸宅に對せり。本校は明治三十四年の創立にして、授業の目的は、女子の徳性智識を涵養し、兼て優美の藝術を學ばしむるに在り。學科を分ちて

- 日本畫 西洋畫 彫刻 詩繪 刺繡 編物 造花 裁縫
の八科とし、各本科と選科とを置く。又本科を細別して
普通科修業年限三年 高等豫備科年限不定 高等科三年
とし。選科を細別して

普通科三年 高等科三年
とす。別に編物料に限り五箇月速成科を設け。又各科を通じて研究科を置く。年限不定
學費は入學金貳圓、授業料本科選科共に普通科は一箇年二十四圓、分納高等科は三十圓、分納研究科三十圓、分納宿泊料一箇月七圓
校長は醫學博士佐藤進夫人佐藤靜子。
明治三十九年十二月現在の生徒總數は六百五十人にて、卒業生四百九十人を出すといふ。

丸橋忠彌の居住地

彼の由比正雪と共に有名なる丸橋忠彌の居住地は、單に御茶の水の上とのみありて、其の所詳かならず。或は云、弓町なりと。或は云、元町なりと。當時は素より番地等の唱もありしことな

らねば、今に至りては舊屋敷地の圖面なき以上は、之を確斷するに由なし。但府内備考は舊圖に大岡源左衛門の名あるを證とし、當町とす。今姑く此に據りてこゝに掲ぐ。

三代の將軍徳川家光薨去し、嫡子家綱四代の將軍となりし慶安四年七月二十三日、浪人由比正雪、丸橋忠彌の逆謀發覺せり。老中松平信綱急に町奉行神尾元勝石谷貞清を召し、切支丹宗門の隠れ居る趣訴人ありと揚言して、神田御茶水の土幕府中間頭大岡源左衛門の邸に向はしむ。此邸内に忠彌借宅して槍術の道場を開き居たるに因る。一同は其の夜深更に懸と提燈を照さず合詞を定めて同邸を圍み、火事と呼はり門を越屋上に登り、喧囂四隣を驚かす。忠彌倉皇火事は何事ぞと、戸を押し開きし所を數人飛掛り、遂に之を捕縛す。其の徒黨も亦捕へらる。既に於て磔刑に處せられたり。辭世の歌と稱するものあり、曰く
雲水のゆくへも西のそらなれや
願ふかひある道しるべせよ

正雪、忠彌等の逆謀といへるは、幕府を倒さむとせしよしなれども、果して勤王の志に出たるか、又は大阪方の復仇に基けるにや。文憲の徵すべきもの甚だ乏しきを以て、今尙ほ疑問に屬す。

昔時居住の學者

文政元年季冬發覺の諸家人名錄に左の如く見ゆ。
學者 本郷御弓町
月所 姓名一字得人 江間五郎作
學者 同
莊嶽 名忠字子順 梶 權二郎
近頃にては水戸の學者にて多く孝經の種類を蒐集せられし青山

勇先生、又寛政以降の名家碑文集を編成せし横瀬貞氏も、當町一丁目に住居せり青山先生は今其の國に在り。横瀬氏は已に物故せり。

●本郷眞砂町

◎位置及地勢

本郷眞砂町其の東端は本郷四丁目に接し、一番地より四番地に至るの間は、甚だ小狭にして、それより漸次西北に延て擴大し西は道路を隔て、小石川區に對し、南は電車線路の大路に臨て弓町一丁目二丁目に面し、北は本郷四丁目と菊坂町に沿て屈曲し、其の北西端は本郷田町と境界を交へたり。地區の番號は一より三十八に至る。地勢は概して高燥なり。但右京原の西部は崖下に在りて特に低窪なりとす。

◎町名の起原并沿革

本郷眞砂町は、寛永以來眞光寺門前と稱し、今の櫻木神社前の一のみ市街地なりしが、明治二年古庵屋敷を併せ、同五年松平伊賀守、松平右京亮の邸址、及び附近の土地を合して、其の町域を擴張せるなり。今の新名を附せしは、明治二年にて、蓋し涯なきを祝せし稱ならむ。

◎景況

當町は方今南方大路に臨みたる所繁華にて、商家相連り、櫻木神社の附近は最も殷賑なり。十番地に西洋料理店彌生亭、十五番地に同富士見亭あり。尚ほ同番地には濱政弘、小山田信藏等居住せり。又十七番地に阪本辯護士、二十五番地に高松育英會(竹島郁)并に下宿業結城館。三十三番地に坂倉勝弘子爵、三十四番地に平野長祥男爵の邸等あり。其他別項記する所の如し。

◎古庵屋敷

古庵屋敷は寄合醫師余語古庵の先祖、寶永元年七月二十七日幕府より賜りし地なり。坪數四百二十六坪三勺二才。其の半を住地とし、其の半を町屋敷とす。同年十一月十五日町奉行の支配に屬し、其の時より本郷古庵屋敷と唱ふ。

◎道造屋敷

舊菊坂町向側は往昔大なだれの崖地なりしに、元祿九年當町の人仁兵衛外十五人。道奉行武島次郎左衛門、伊勢平八郎に請願し、なだれ地延長二百五間餘與行三間乃至四間半を埋築して市街地と爲さむとし、其の許可を得て翌年工事を竣成し、同十一年町方支配となりて、本郷菊坂道造屋敷と唱へ、十六人にて之を所有せしが、寛保年間故あり公收せられ、延享元年入札に付し、當町の人安右衛門、權左衛門に上納請負を命せられ、菊坂上納屋敷と唱へしに、其の後屢々隠賣女の檢索あり、寛政十一年十一月十八日市家を撤して武士地と爲し、遂に旗下及び小役人の拜領地となれりといふ。

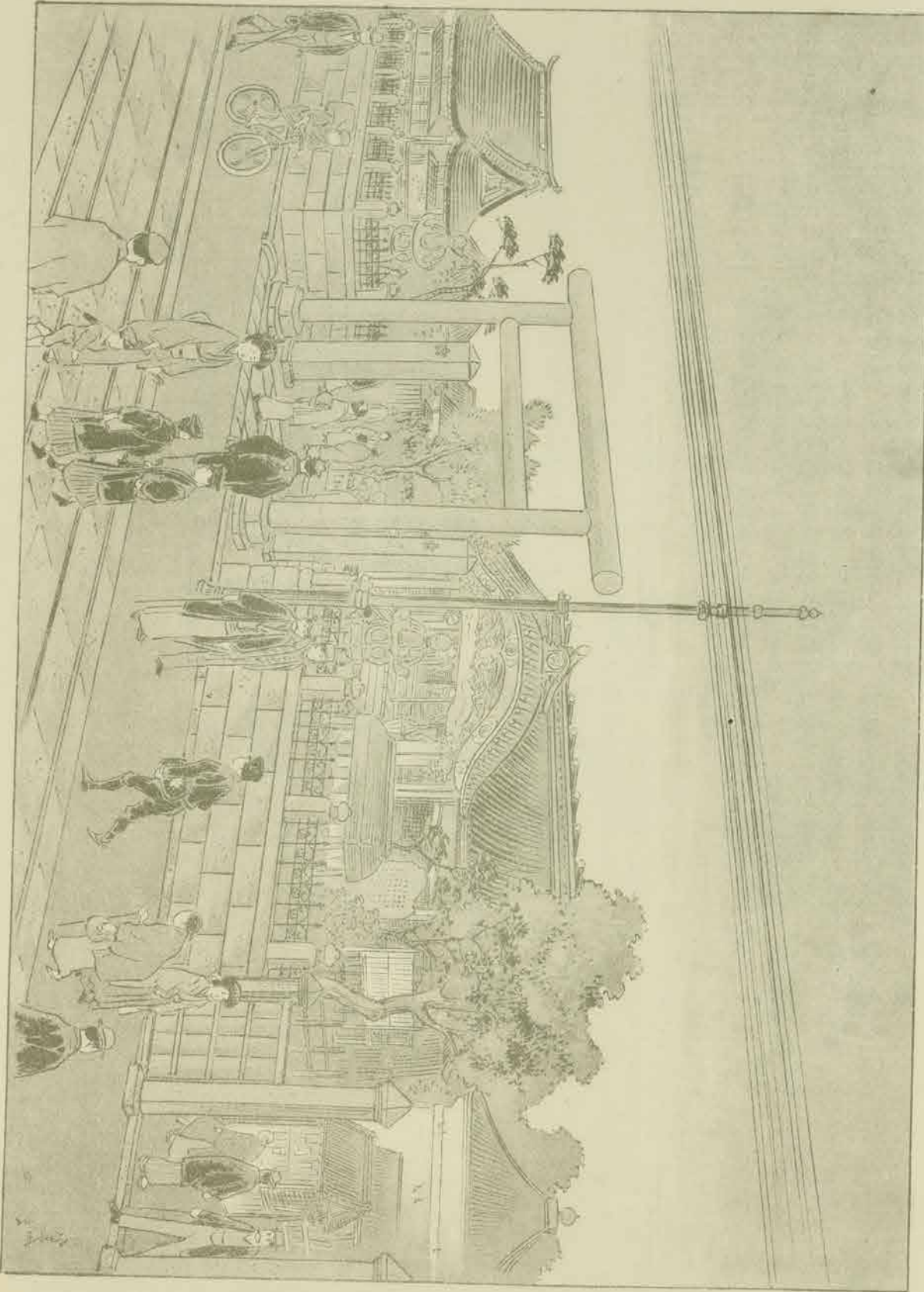
◎東富坂

東富坂は當町の南弓町一丁目の間を小石川春日町の方へ下る坂をいふ。往昔は爲坂と呼べり。小石川の富坂に對し其の東に在るを以て名く。今其の北方右京原の一隅に市區改正の新路を開き、電車を通ずるに至れり。

◎右京原

本郷眞砂町の西部三十九番地は、俗間に稱して右京原といふ。もと松平右京亮の中屋敷ありしに因る。本郷聯隊區司令部の前を西に進めば、崖地の上に出づ。此地を北に行き、又西に進めば一の丘上に登るを得べし。此邊一圓に草を生じ、丘陵起伏の空原にして、最も童兒遊戯の地に適す。丘下は南北に空地を劃

圖の社神木櫻



して二ヶ所の學生テニスの運動場あり。試みに丘上に立て眺望すれば、北は本郷田町を俯瞰して、駒込西片間の高崖と相對し東は臺町に連りたる下宿屋の三層樓屹として聳え、西は護國寺附近の高地と相面し、砲兵工廠より善光寺の新殿等樹間に隱見し、風景尤も佳なり。何とてかゝる土地を空しく草萊に委するのや。崖地なるを以て築造工事の困難なる故にやあらむ。惜しきことなり。

●本郷聯隊區司令部

本郷聯隊區司令部は、本郷眞砂町三十七番地。即ち右京原の上に在り。明治二十一年五月の開廳にして、第一師管第二旅管に屬す。

もと本郷元町に在りて、本郷大隊區司令部と稱せしが、二十八年三月現地に移りて、今の名に改めたり。其の管轄區域は左の如し。

東京府 本郷區 下谷區 淺草區 本所區 深川區

北豐島郡 南足立郡 南葛飾郡

埼玉縣 北足立郡 南埼玉郡 北埼玉郡 北葛飾郡

司令部には司令官、副官、書記あり。司令官は師團長に隸し、聯隊區内の徵兵事務及び召集事務を掌り。又其の區内に現在する在郷陸軍軍人及び各補充兵役に在る者の異動、其の他願届に關する事務を處理す。副官は司令部一般の事務に服し、書記は上官の指揮を受け記注計算の事に従ふ。

●眞砂町郵便局

眞砂町郵便局(三等)は、眞砂町十六番地に在り。郵便局窓口引受、交付を爲し、爲替貯金及び取立金の受拂、居室拂を所管とす。

●眞砂小學校

眞砂小學校は眞砂町十二番地に在り。表に石門を連れ、煉瓦塀の上に鐵柵を設く。校舎は木造二階建にて昨年の新築に係り。詳細の事項は次編に掲ぐべし。

●櫻木神社

櫻木神社は本郷眞砂町六番地に在り。倉稻魂命及び菅原道真を祀る。前面に華崗石の鳥居を建つ。明治三十二年氏子の設くる所にして、石工は酒井八右衛門なり。入口に石門あり、三十四年六月堀江半兵衛の建る所、左右は石の玉垣なり。神殿は南回し、銅葺き破風造りにて、鳳凰、松竹梅、龍の彫刻を施す。前面に櫻木神社の金字額を掲し、殿内には天満宮の舊額を掲く。東側に神輿を置き、西側に太鼓を掛けたり。前檐には二個の銅燈籠を吊し、殿前には左右に銅盤と石駒を排せり。西畔に神樂殿あり東畔に水屋あり。

明治三十五年四月菅公一千年大祭の時建る所の神文中に當社の沿革記したり。其の節文左の如し。

舊稱「櫻木天満宮」祠記曰文明太田道灌築江戶城、乃建「祠於城北櫻馬場」奉「公木像」及「徳川氏開府江戸」元祿中建「昌平」爰於「此徙」于今地「地係」富元山眞光寺城「寺僧司」其祀「明治初勅頒」社寺制度「更置」社城「置」史祝「云々」

太田道灌か始て櫻馬場に建てしが如くいへるは、恐らくは誤りならむ。櫻馬場の出來しは天和の火災後なり。道灌の時に櫻の馬場と稱するものなし。

武江圖説に云本郷天神社 四丁目 駒込富士別當持なり本郷六丁分總鎮守 別當富光山眞光寺瑞泉院 眞言上野末或天台社傳云見送り天満宮と云菅家筑紫へおもむかせ給ふ時自ら刻み形見

に給ふ所なり往古御城内に在り太田道灌信仰其後平川天神は麴町へ移され當社は駿河臺へ移さる其後又本郷一丁目へ移す此時至て小社舊記も其頃失ひしよし其後當所へ移さる往古此わたり奥州海道にて此眞光寺も小菴なりとぞ

此説に據れば、當社は其の初江戸城内に在りしなり。平川天神と當社と同所に在りしこと疑なき能はず。又湯島天神も亦道灌の建る所といふ。同じ本郷に二社を置しこと、何の故なるを知らず。

當社は明治五年十一月村社に列せり、大祭は八月二十六日なり

●本郷菊坂町

◎位置及地勢

本郷菊坂町は、其の地形凹凸不整にして東は、本妙寺の境域其の九分を有して、本郷四丁目、五丁目、六丁目に接し、南西は斜に眞砂町に連り、北は臺町を擁し、其の北西端は斗出して森川町に接せり。地區の番號は一より九十四に至る。

其の地勢は本妙寺の邊のみ高く、他は兩丘間に介在して溝渠其の中に通し、最も凹地なりとす。

◎町名の起原并沿革

本郷菊坂町の稱は、往昔此邊一面に菊畑ありて、菊花を培養する者多く居住せしを以て、其の坂を菊坂と唱へ、坂上を菊坂臺町、坂下を菊坂町と唱へたるより起れり。此地を幕府の中間方に大繩にて賜與せしは寛永五年なるよし。故に町屋を建しはそれより以後なることは明かなり。明治二年道造屋敷の殘地及び本郷四丁目、五丁目の代地を併せ、又傍近の土地寺地を合して其の町域を擴張せり。

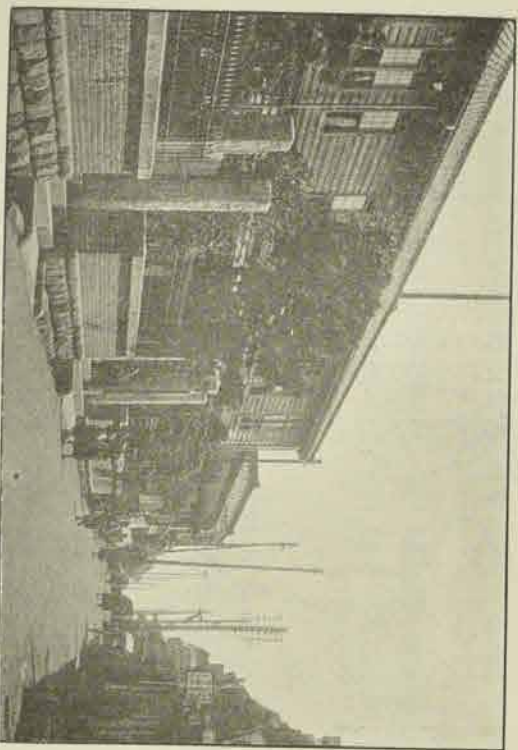
◎景況

當町は、寺院の外大抵商家にて、附近に學生の寄宿せる下宿屋

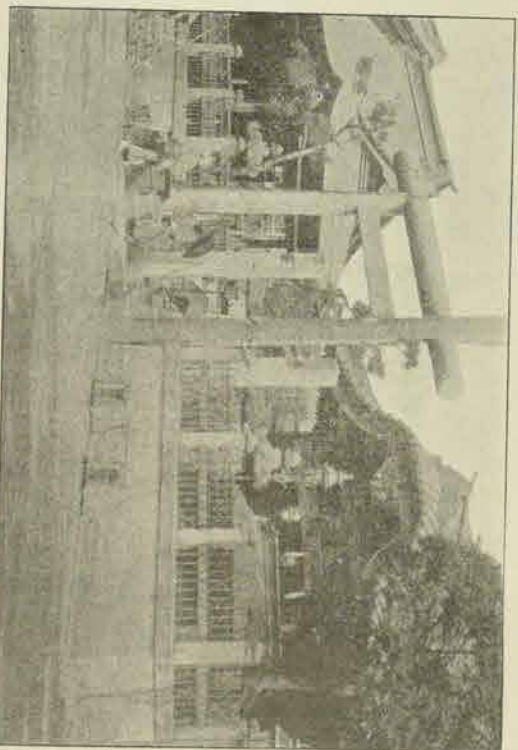
多きを以て隨て繁昌せり。十六番地の旅人宿菊富士樓の外、富士見軒、常磐館、富士館、赤心館等の下宿屋あり。又二十三番地に婚成社(武島彌内)。五十番地に寄席新市場亭、八十二番地にアルプス鐘泉浴場等あり其の他別記せる所の如し。

●梨木坂 戸田茂睡の居住地

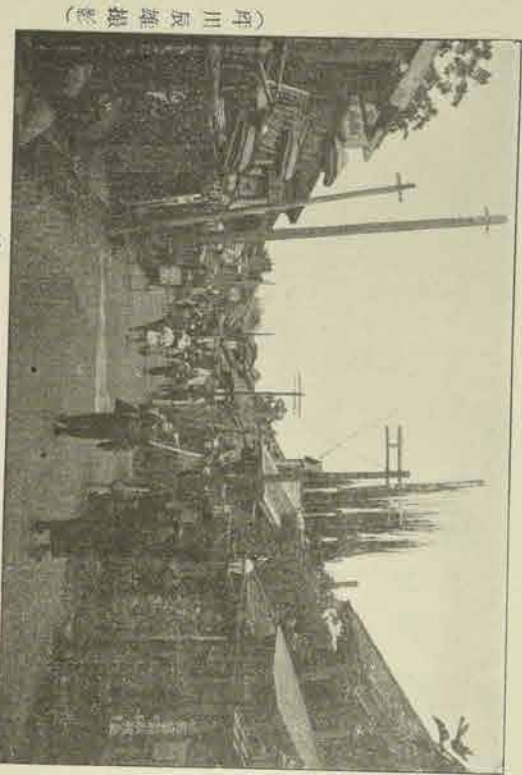
梨木坂は菊坂町の中央に在りて、北の方臺町に上る坂をいふ。府内備考に改選江戸志を引て云。梨木坂は菊坂より丸山通りなり。むかし大木の梨ありし故坂の名とす。南向茶話云。戸田茂睡といへる隱者、此所に卜居して梨の下の茂睡といひて世に名高き人なりと。今按に、茂睡が父を渡邊隆物忠といふ山城守重綱に作る。に養はる。番頭なり實は戸田與五左衛門忠勝が二男なり。慶長五年上杉景勝御征伐の時、父がかはりとして組の大番衆を率ひ、十六歳にして供奉し、その後父と共に伏見の御城を守る、後又駿河大納言忠長卿の家老となり、別に五千石を領し、かの卿の御事ありし時、妻子と共に大關土佐守高増にあづけられ、かの領地下野國那須郡上の庄東山の西黒羽といふ所に閉居し、後赦をかむむりて子孫今かの家につかふ。茂睡は忠の六男なり。父が實の名字戸田に改む。俗稱八兵衛といひ、後ち茂右衛門とあらたむ。諱は恭光年老て茂睡と稱し、露塞軒と號す。寛永六年五月十九日駿河國府中の城三の丸に生る。いとけなき時より父と共に黒羽に居れり後江戸にいたり。和歌をよくするを以て時に名あり。詠する所の歌多く人口に膾炙す。寶永三年四月十四日卒す。七十八歳、或云子孫御家人となり、火消與力をつとむ。これも家絶たりと。茂睡が菴の前に大なる山梨の木一もとありしにより、梨の本といふ、是のままの梨木坂なり、善す所の書梨本集、紫



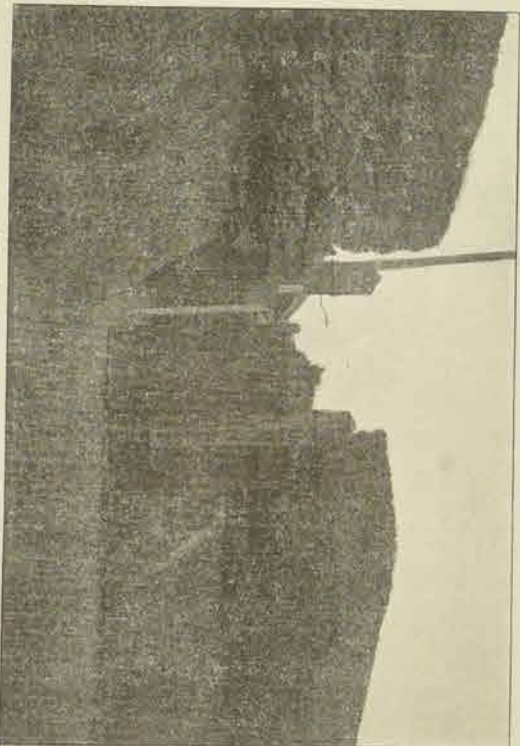
校學小等高常尋砂真



社神木櫻



町坂菊



部令司區隊聯郷本

(河川辰雄撮影)

一本、隱家百首、鳥の跡、庄九郎物語などいふものありて、世の人もてあそべり。
同書又記して云ふ。此邊昔時菊畑ありしに、此坂邊はなかりし故菊なし坂といひしをいつしかなし坂と唱へ來れりと是れ亦一説なり。

● 鑑 坂

鑑坂は炭團坂の西に在りて、菊坂町と眞砂町との間を南の方弓町一丁目の通へ上る坂路をいふ。其の形鑑に似たるを以て名けしならむ。
改選江戸志にいふ。鑑坂は御弓町より丸山へ下る坂をいふ。往昔の所に武藏鑑を製し初しもの、子孫ありて、鑑を作る故に坂の名とすといへり。江戸志云、武藏鑑は古き歌道の傳にして舊記にも多く此事をのせたり。武藏鑑とは今いふ五六の鑑なり續日本紀云。元正天皇靈龜二年五月辛卯、高麗の人一千七百九十人武藏にうつすと見ゆ。かれらが内にて、五六の鑑を初て造りけるより、當國の名産とはなれり、高麗郡は今の府中の邊なり。その子孫この所に住せしこと年ありといふ。按に武藏鑑の事はさもありぬべけれどこれが、子孫この所にありしといふに至りては、他の書にいまも見ざる事にして甚うけがひがたし。例の好事のもの、鑑坂といふによりかゝる附會の説を唱へしなるべし。セッ坂のかたちの鑑に似たるによりて土人のかく名付しなるべし。

因みに云。五六の鑑のことは安齋隨筆松屋筆記等に出たれば就て見るべし。

● 菊 坂

菊坂はもと菊坂町より東に向ひ、臺面上る急坂の名なりしが方今は北に曲りて田町に下る坂路の稱となれり。

● 本妙寺坂

本妙寺坂は本妙寺の前に當りて、眞砂町に上る坂をいふ。砂子に丸山本妙寺のむかふの坂をいふとある者は是なり。昔時は小笠原壹岐守の所管なりし。

● 炭團坂

炭團坂は本妙寺坂の西に在りて、眞砂町に上る坂をいふ。往昔炭團を商する者多く居りしに因り此稱ありと。或は云ふ。此坂切立にて最も急なる坂なるを以て、往來の人轉々落る故に名とすと。

● 舊里正と其の所管地

天保の江戸町鑑に左の如く見ゆ。
拾四番組 萩原 金藏

一本郷菊坂町

一同所道造屋敷殘地

本郷菊坂上納屋敷

寛政十一年十一月八日小田切土佐守様御掛りにて、町家取拂當時武家地に成る。

同町往時の里正は吉野喜兵衛なりし。續江戸砂子に云。本郷菊坂町本郷五丁目の西手此間に丸山といふ所あり本妙寺長原寺あり製坂

○同所田町○同所臺町○小石川町○道造屋敷

此分名主吉野喜兵衛

● 本妙寺

本妙寺は、本郷菊坂町八十二番地の一號に在り。總持院と稱し徳榮山と號す。法華宗にして越後國本成寺の末なり。

表門は南に向ひ、瓦葺き素木造りにて「法華宗教區宗務支所」の標札を掲ぐ。門内東側に舊寺中たる本行院、東岳院併合してあり。住持田邊慶達。次は下宿葉田中某、即ち東岳院の跡なり。

次は本立院、圓行院是亦合併してあり。住持は石川教隆。西側は圓立院、了徳院、立正院の併合寺院あり。住持田邊日煇。次は妙雲院、次は感應院、次は本藏院なり。中間に敷石の路ありて、本妙寺の佛殿並に玄關に達す。左右の子院盡る處。西に石井を設け、其の先に三十番神の堂を存し。前に石燈兩基を建つ傍に石の寶塔あり、天明八歲次戊申十月從五位下豐後守菅原雅寔建之と刻せり。塔前に老木櫻あり、其の幹半朽ちぬ。東方鐘樓の南畔に俳句の碑を建つ。弘化四年丁未の春置く所に係る。鐫列左の如し。

蝶々や吹れて渡る川の幅
持もつて鐘の供養もさくら哉
朝かほや散う物なら猶哀れ
田へ通ふ水の音あり春の月
涼しさや流るゝ水の淺き程
いたづらに照り明しけり冬の月

百草園寸長
細流菴南架
揚柳菴周綾
鶉菴 歩牛
青藍堂菓嘉
餘月菴築鳥
竹裡房夏口

本堂即ち佛殿は西位に在りて東回し、瓦葺き素木造り、玄關は別に其の南に在り、鴉鳩三四屋上に遊居するを見る。

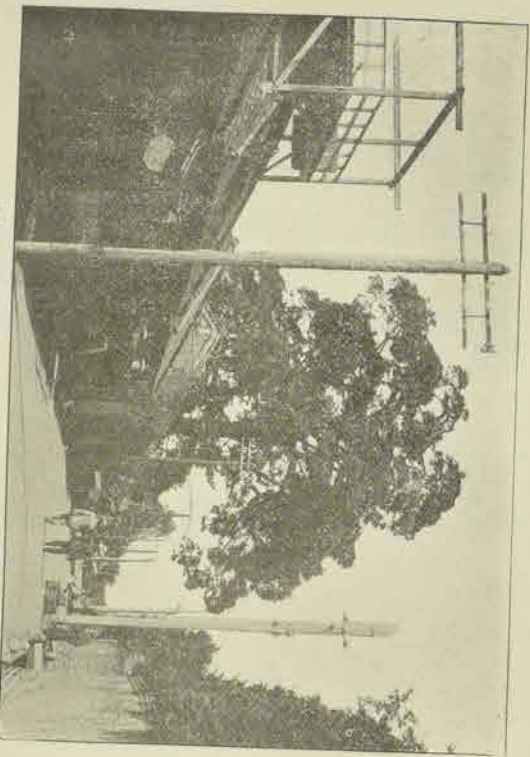
明治三十一年六月出版の東京案内記に、本寺の景況を記して云く。菊坂町一線を隔て、對岸、高く樹木茂れる所に本妙寺あり右なる門には日蓮宗二派宗務所。左なる門には長久會本部と、其柱に筆太に標札を釘しぬ。門を入れれば境内頗る清淨にして間靜なる所、本行院云々雅樂協會あり。天女の奏樂妙音を空林に響かして庭上自ら塵なし。寺境を繞れる俗家亦往々學生棲家の段、朝夕呬暗の聲梵唄と相和していとゆかし。今や奏樂の妙音は聞ゆるなしと雖も、學生の棲家即ち下宿屋は依然として多ければ、呬暗の聲は舊に仍りて盛なり。

寺傳に云。當寺は正親町院御宇元龜二年辛未駿河國に開闢し。天正十八年彼國より江戸清水御門の内に入り、又飯田町に轉す。その頃は寺も美麗なりしかば世に板屋寺と稱したり。今案るに。此頃はかや音のみ多かりしかば、板屋は殊に珍らしきこと見えし。事蹟合考に云。古老の話に福井の松平の本家筑後守四番町の居宅かき音にせしめて、人々見物いたせしと云々。誠に延享より凡五十年前は六番町、三番町通り其外も類焼せざる古來の儘の武士屋敷は、皆萱葺にてありしこと、弱年のむかしよく覺えたることなり。寺院もこれにひとしかるべし。

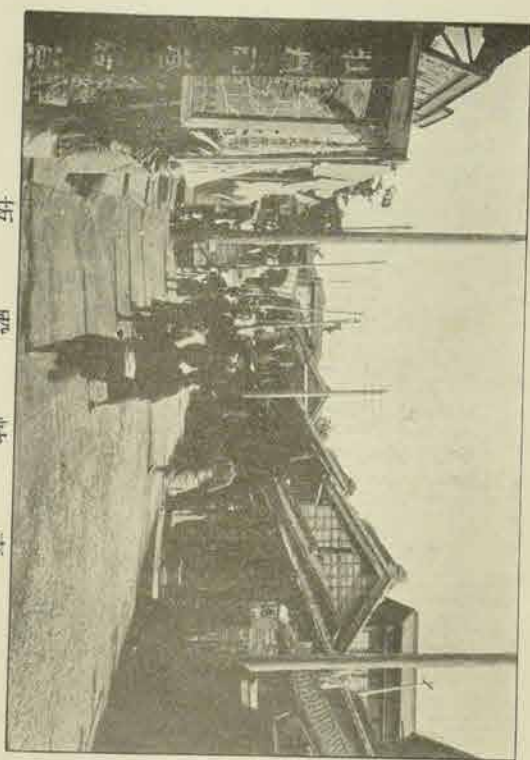
此事徳川家康公の上間にも達し、御稱美ありしといふ。慶長年中また牛込御門の内に移り。元和二年丙辰小石川に移り。其後四世智運院日圓のとき寛永十三年丙子今の本郷丸山にうつる。明暦三年丁酉七世靜世院日隱のとき、當寺より出火し、大火となりて江戸の中三分の二鳥有となれり。是を世に丸山本妙寺火事とて、たぐひなき事とせり。寛文七年丁未勝劣派の觸頭職をうけ給はる。

開山智存院日慶上人は、越中の人なり。久世三四郎、大久保新八郎、阿部四郎五郎の歸交僧にして、歳二十六。駿河に當寺を創立し、菩提寺と爲す。本府に移轉し在職四十餘年。退院の後も寺中に隱寮を設く。感應院是なり。元和六庚申年二月十四日遷化。歳八十五。

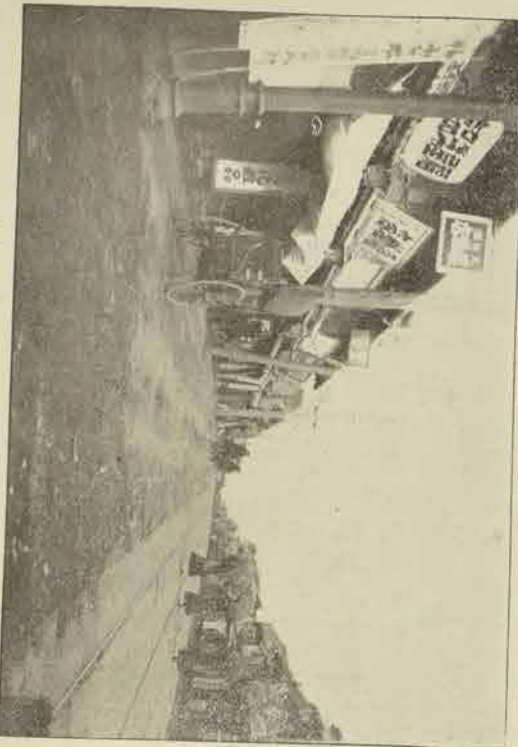
○開基檀越六人
其一大久院殿淨源口保居士俗名大久保忠俊
天正九辛巳年九月二十六日卒三州尾尻村長福寺に葬る
其二智感院殿徳源日久居士俗名大久保忠勝
慶長六辛丑年九月二日卒三州尾尻村長福寺に葬る



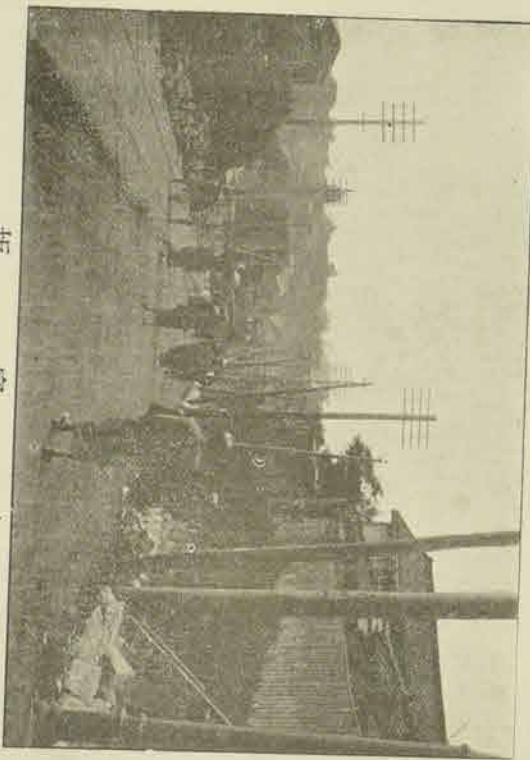
補の町弓



坂殿岐壹



町弓



坂富東

(坪川辰雄撮影)

其三本地院殿日玖居士俗名大久保康忠

元和七辛酉年十月九日卒當山に葬る

其四眞性院殿日詠居士俗名久世廣宣

寛永三丙寅年三月十九日卒當山に葬る

其五源光院殿常覺居士俗名を逸す

慶長十二丁未年五月六日卒三州尾尻村長福寺に葬る

其六正善院殿日住居士俗名阿部正之

正保四辛卯年三月十二日卒當山に葬る

○中興本山十六世靜明院日柔上人

正保七丙戌年四月二十九日遷化九十九歳

○中興檀越自證院殿心光日悟大居士俗名久世廣之

延寶七己未年六月二十五日七十一歳

○寺中

開立院圓乘坊 坪數百八坪餘

久世家祖先の菩提所なる三河國額田郡尾尻村長福寺地中圓乘坊住持圓立院日怡は、久世三四郎廣宣の歸依僧なるを以て、天正十八年本妙寺移轉の際當府に來り、久世家に寓居す。日怡乃ち本妙寺開山日慶上人に隨從し、三檀家久世三四郎、阿部四郎五郎、大久保新八郎と其の志を同じ、清水門内に本妙寺を建築するの際之を創立せり。

開基久世三四郎廣宣法名眞性院殿日詠居士。寛永三丙寅年三月十九日卒

開祖圓立院日怡元和二丙辰年十月十四日遷化。歳七十二。

惠雲院一妙坊 坪數九十三坪余

創立の年月詳ならず

開祖本院了日相、萬治四辛巳年三月十二日遷化。

本藏院玄養坊 坪數百五坪半

創立の年月詳ならず

開祖本院開山弟子本藏院日定、寛永十八辛巳年九月四日遷化。

寺寶賀古正利歌

蓮山尊靈追善のためとてかののこしおき侍りける衣裳

なと佛のかさりにいとなみて寺におくり奉るとて

源 正 利

なき人の身のから衣たちかへて

はかなき後の世をなけくかな

本行院成本坊 坪數百八坪余

創立の年月詳ならず

開祖本行院日善寛永三 寅年八月朔日寂

東岳院泉林坊 坪數百八坪余

創立の年月詳ならず

開祖經妙院日典正保元 年八月十一日遷化

本立院 坪數百坪半余

創立の年月詳ならず

開祖同山内感應院二代本立院日誠元和六 申年十二月三日遷化

圓行院 坪數百十八坪余

創立の年月詳ならず

開祖圓行院日受慶安五壬辰年九月十九日寂

立正院 九十六坪

本院五世立正院日貞(平岩氏)は日慶上人の法嗣なり。大久保新八郎康任の歸任僧にして、慶安年間本坊退去の際創立す。

開祖日貞慶安四辛卯年七月十日遷化

開祖日貞慶安四辛卯年七月十日遷化

開祖日貞慶安四辛卯年七月十日遷化

開祖日貞慶安四辛卯年七月十日遷化

開祖日貞慶安四辛卯年七月十日遷化

開基照源院日統居士。俗名大久保新八郎康任、延寶八庚申年五月十日卒。

了德院信入坊 碑數六十九坪半余

寛永年間創立

開祖本院三世正法院日窓、正保三丙戌年九月二十日遷化。

中興二世信入院日淨、寛文六丙午年九月二十八日遷化。

感應院一林坊 碑數百十坪

創立者は開山東慶上人にて、即ち其の隠察なり。

開山日慶上人

久遠坊

創立の年月詳ならず

開山正法院日窓、正保三丙戌年九月二十日遷化。

八世長流院日汲、延享二己丑年十一月十一日遷化。

日汲遷化後寶曆九年上申して姑く廢閉す。

本玄坊

創立の年月詳ならず

開山玄悟院日淳、慶安二己丑年八月二十日遷化。

七世玄二院日受、寶曆十三 未年十二月九日遷化。

日受遷化後明和三年十月姑く廢閉す。

什物

一部十卷一箱

法華經

天和元辛酉年十月十三日徳川家光公養女、實は菅原氏、小松中納言利家公息女。法號自昌院殿英心日妙大姉の書する所なら。

同上筆

一部折本七卷一箱

記す。

明曆燒死者供養塔

一業所 感燒死群類靈于時明曆三丁酉正月十八九日とあり。

大久保新右衛門忠則墓

覺勝院殿日住靈儀延寶四丙辰六月二十八日

大久保久八郎忠成墓

顯性院日體靈位寛文九己酉八月七日

久世廣之墓

丈餘の大墓碑にて、上頭に八字の題目を刻し。左右に於我滅度後應受持斯經。是人於佛道決定無有疑とあり。中央に眞性院殿日詠覺靈位。時寛永第三丙寅曆姑洗十九。傍に施主孝子久世三四郎廣宣と鐫す。

神谷作左衛門尉正船墓

一丈五尺許の大碑にて、法蓮院日用靈、寛永十六曆九月十二日とあり。

阿部四郎五郎忠政墓

五輪塔にて慶長十二丁未五月六日とあり。傍に阿部大藏定吉天文四年二月二十四日、阿部大藏定吉天文六年十一月二十七日阿部大藏定次天正十年十一月五日、阿部四郎五郎定重永祿二年九月十五日と一石に連刻したる墓あり。後に建たるものなるべし。

久世重之墓

下總國世喜宿城主從四位下拾遺補關兼大和守源朝臣久世重之。享保五年六月二十七日とあり。

松平喜生墓

靜洞院樂山自然大居士、從五位下前但州松平喜生墓。文化十四丁巳歲七月二十四日とあり。

傳教大師經文切 二行三十四字法華經第五卷

日蓮上人眞蹟大黑天神

其の他明兆筆官女唐子の圖、狩野探信、養川等の繪畫數幅明人張弼書卷物及び龍蛇の乾製等あり。

鐘樓本堂の前方東に在り。二間半四方にて四柱を有し、瓦葺にて石垣の上に構造せり。

慶安二年七月十五日當寺第五世日貞上人の時創建する所、其の銘文左の如し。

題目

蓋聞鐘鼓者。弘通之資具。濟物之法器也。凡寺觀安衆莫不利用之。若如三陀王釋劍唐主脫之械。是其勝益也。矧又降伏魔外。摧擢龍鬼。衆生歡喜。諸天衛護。如斯妙用不可稱計。粵檀主捨財治工鑄鐘。供獻三寶。警動群心。冀利益無窮功德莫測焉。

銘曰

武城之北 德榮道場 巧鑄銅錫 新建寶堂

蒲牢隱々 華鯨鏘々 沙鐘之暮 豐嶺之霜

千里覺夢 萬歲禳殃 利天人地 益過現當

桑門紹繼 檀宇殷昌 復哉絃響 傳三星宿央

時慶安己丑歲七月十五日

願主諸檀那

願以此功德。普及於一切。我等與衆生。皆共成佛道。

治工洛陽住源正俊

立正院日貞謹誌

武州江戶德榮山本妙寺住持

墓域を巡檢せしに注目を惹ける墳墓少からず。左に其の大略を

本因坊歴代墓

道策以下皆あり。

池守秋水墓

龜田綾瀨の撰文を刻す。

遠山景晉墓

從五位前左衛門尉藤原景晉入道遠山樂土之墓。天保八丁酉七月二十二日とあり。大學頭林衡の撰文を刻す。

遠山景元墓

歸雲院殿從五位下前金吾校尉松亨日大居士傍に遠山氏六代目左衛門尉景元、安政二年乙卯二月二十九日とあり。

遠山氏父子は幕府の名士にして近世有名なる人なり。今其の略履歷を左に記載す

遠山左衛門尉は、幕府の町奉行なり。名は景元。初め金四郎と稱す。父の俗稱を襲ぐなり。父名は景晉。文化元年魯西亞の使等長崎に至りし時。目付を以て應接の儀に與る。同じき四年魯人蝦夷に寇す。景晉命を奉して之に赴き、村垣淡路守と共に一書を作る。西蝦夷日記といふ、寫本を以て傳ふ。後長崎奉行勘定奉行等を経て、左衛門尉に除し。天保七年八月を以て歿す。景元人となり慧敏。然れとも少き時放蕩にして檢束なく、常に酒を好み娼家に宿す。既にして自ら怨交し、旣然其の行を改む。家を承るに及び、目付に抽てられ、天保十一年北町奉行に移り。亦左衛門尉に除す。此時に方り老中水野越前守銳意新政を施す。景元矢部左近將監、鳥居甲斐守等と前後比肩して江戸市中改革の事を司りしが、十四年三月に至りて罷めらる。弘化二年甲斐守敗るに及び、復た南町奉行に任せられ。職に在ること前後十一年、嘉永五年に至りて罷む。薙髮して歸雲と號す。傳へ云ふ、景元狹斜に游蕩せし頃

無賴子弟に伍して腕に櫻花の文身せり。故に顯官に登るに及び、常に緊く親衣を著し盛夏と雖も脱することなし。然れども此故を以て頗る下情に通し。明鑒鏡を懸るが如く、人之を欺く能はず。近代屈指の良市尹たり。嘗て吉原某樓の娼妓盗入の繫累に因り、法廷に召喚せらる。恒例娼妓法廷に至る時は、樓主、娼婆之に介す。娼婆もと景元を識る。其の器度を試みひと欲し、景元の座に就くを見て、故らに驚きたる真似し、聲を揚げておや金さむと呼ぶ。景元泰然微笑して曰く久しく相見す。幸に恙なきや。今予既に天下三奉行の一人なり。汝老境に至りて猶未だ娼婆たるを免れざるかと。娼婆報然一語を發する能はずして退くと。安政二年二月二十九日病みて卒す。歳五十餘。

●本妙寺火事

明曆の大火は最も有名なる火災にして、之を記載せる書少しとせず。理科會粹東京氣象編に記する所は簡明にして分り易ければ、左に之を掲ぐ。

明曆三年 正月十八日午後二時頃、本郷本妙寺より出火し、湯島神田邊より淺草門に至り。内神田は鎌倉岸より南は八丁堀東は深川に至る。

長さ四十八町

方向 北三十度西

翌十九日午前十一時頃。小石川傳通院前より出火し、小川町邊一間府城を焼き。(西丸は残る)大名小路一圓、新橋邊より海濱にて止る。

長さ五十三町

方向 北二十度西

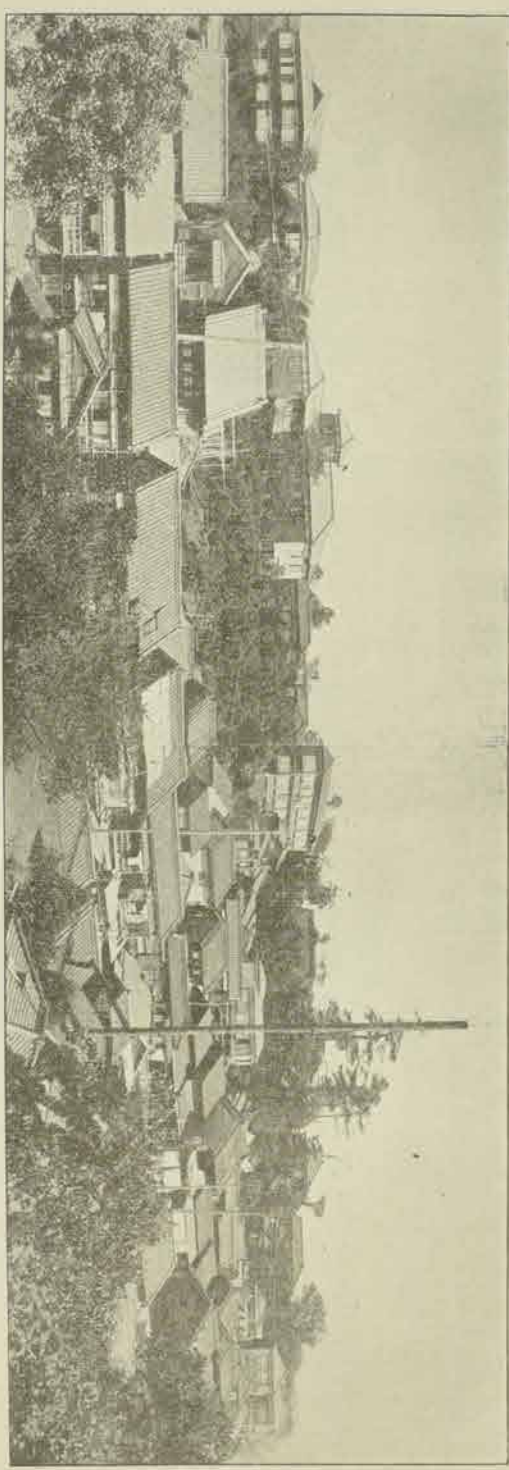
同日午後廻町五丁目裏民家より出火し、櫻田愛宕下邊より芝札の辻(田町二丁目三丁目邊)海岸にて止る。

長さ四十町

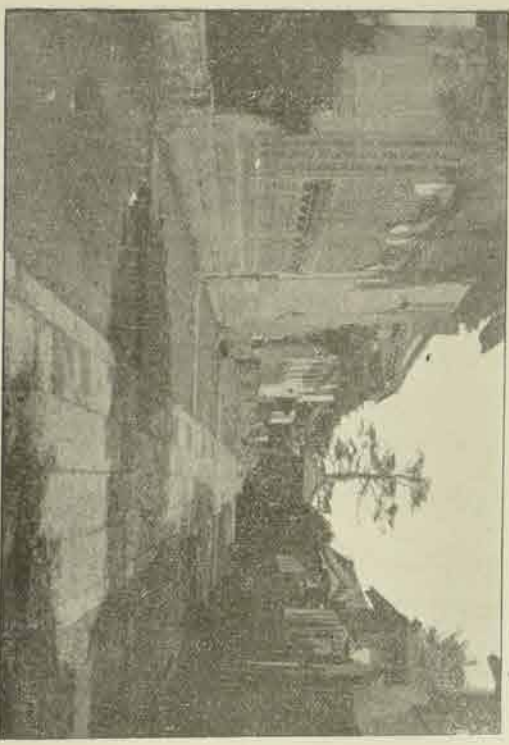
方向 北十度西

右の三大火災に因り、東京全府を焼亡すと云ふも過言にあらざるに似たり。當時の記録を按ずるに、前年十一月より八十余日の間一滴の降雨なく、日々西北風強く、砂塵を颯け、家屋甚しく乾ける折、此大火起れり。今記に據り風の速度を概算するに火勢の盛なる間即ち十八日午後より十九日夜までは一時六十英里位の平均なりしやに想像せらる。此速度を以て乾燥なる家屋を焼く。固より家の盡くるに至らざれば熄まざるは視易きことなり。此火災により死亡せし人員は十萬七千とも其の數の夥かりしは以て知る可し。當時其の屍は皆水火の爲めに糜爛して、其の誰たるを辨すること能はず。或は親族の葬るものなきを以て、數日道路に累積す。是に於て政府令して本所の地に一大坑を穿ち盡く聚めて之を合葬し。一寺を建つ。今の回向院是なり。右三大火災を明曆の大火と稱し長さ合して百四十一町なり。

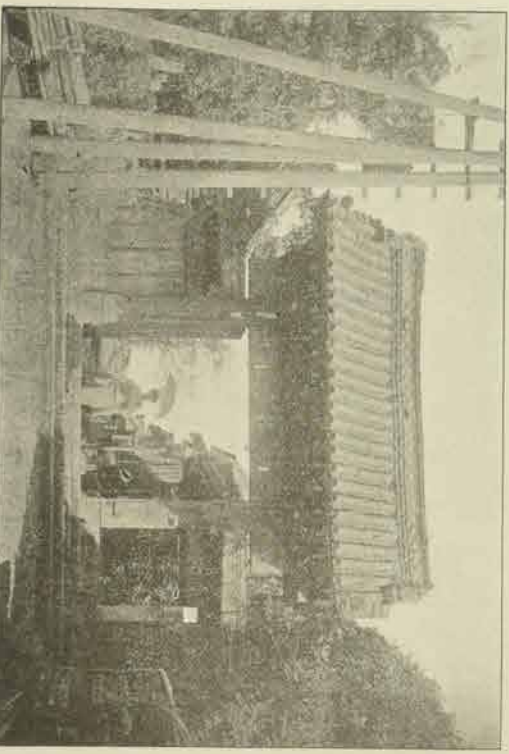
丸山本妙寺の火災は、俗傳に之を振袖火事といふ。一綉衣を其の堂下に焚くより起れり。其の事は輪迴應報に係る。菊池三溪嘗て之を丸山火災と題し。其の著本朝虞初新誌卷中に詳叙せり文長ければこゝに録せず。依田學海附記して云ふ。嘗聞之故老。本妙寺之災先是亦有之。一日寺僧某上人誦經供佛。忽見一條線香斜倚堂柱。煙々有聲。其光如燈。衆驚欲灌澆水滅之。上人舉手止之曰。一線之香理不足成焰。而今如此。豈劫火之數有不能免者邪。假使滅之今日不得滅之他日必矣。言未畢。烟煙漲天。頃刻爲燼。延燒數十里云。嗚呼不盡之於人事。求之於氣數。杯水不救以致炎災。彼何心也。此學海翁の記に先是亦有之と見ゆれども。明曆以前に本妙寺よりの失火ありしことを聞かず。是より後二十三年を経て、



町 寺 郷 本



内 門 寺 妙 本



寺 妙 本

(坪川辰雄撮影)

又失火ありしは事實なり。武江年表に云。天和元年辛酉十一月二十八日。丸山本妙寺より出火。本郷駒込熾失」とあり。以て證すべし。

●長泉寺

長泉寺は本郷菊坂町十五番地に在り、曹洞宗にして祝峯山と號す。小石川戸崎町祥雲寺の末なり。開基は僧牧中(永祿三年寂)開山は僧幹遠(寛永十六年寂)にして。永祿三年小石川金杉に創建し。寛永十三年此地に移轉せしといふ。本妙寺の前を西行すること數十歩。北に當りて山門を認む。石路以て達すべし。左右に一列各四株の松樹あり。門前には例に仍りて不許葦酒入。山門(安永五年月舟禪師書)の石標を建て。門には篆字の祝峯山の題額を掲ぐ。東臯越杜多とあれば、心越の筆なり。本堂は南面して在り。目下修繕中に係る。墓域を巡檢せしが、記者が注目を惹きし墳墓は左の如し。

○佐倉侯侍讀太室澁井先生墓

墓誌の終りに、友人尾張國侍讀細井德民選とあり。紀平洲の文と知らる。又其の表面に左の刻文あり。此墓の由來を證すべし。

是所建于大坂生玉玄德寺。我師太室先生墓碑之記也。孤子至德嗣。祿住東都。悲千里之外。不能時祭。其墓故勒。其文於此石。建之本郷長泉寺。以爲如在之位。嗚呼骨肉歸。復于土。若魂氣。則無不之也。神尙享于孝子子孫。于斯。

天明八年戊申冬十月十四日。弟子清水長年謹志。

○佐倉故年寄澁井府君墓

二基あり。至德の墓。選文は益城松崎復。一は達徳の墓。選文は佐藤垣なり。

○貉丘岑先生墓

醫師なり。名は逸字は班如。一字は歸昌。初め右膽と稱す。少翁と改む。吉益東洞の弟子にて、豪邁膽氣あり、文化中に歿す。事は載せて皇國名醫傳に在り。

○菱川大觀墓

佐倉教。官奏嶺菱先生墓とあり。其の銘は左の如し。

菱大觀墓碣銘

尾藤孝筆

余少壯之時、與君相知于大坂。年相若、學亦同。其趣君素好文。章有所著。作必使余評品。是以其交日相親狎。天明年中君筮仕爲堀田侯儒臣。侯時留守大坂。越三年、寛政辛亥、余召至江都。適君亦東伴。讀其世子。於是亟相往來。如在阪日。候食封下總佐倉。君年一往教授。其人趨學者日衆。君之力也。君姓菱、諱實。字大觀。號奏嶺。稱守門。備前赤坂郡小森村人。少長於岡山城中。其先世皆以勇武、顯名於尼子毛利間。至君始業詩書。其取友必益。不常一師。記識該博。亦多所討究。爲文暢而有法。其人如也。所著正名緒言。有裨名教。及詩文若干卷。行將謀上梓。享和癸亥七月九日。以疾卒於江都佐倉邸舍。藏在本郷丸山長泉寺內。年五十有六。無子。侯命以山本氏子在奉其祀。既葬配杉氏使在乞余銘。義不可辭。乃叙其所見聞。而係銘。銘曰、

武人之裔、何炳之文。質美學富、優哉斯人。出辭弗苟、立操寔堅。文而不靡、屈不求信。人撫其華、不見其實。玉之温只、孰知夫栗。

●本郷臺町

柴田市太郎寄稿

○位置及地勢

本郷臺町、東は本郷六丁目に界し、西南は菊坂町に隣し、北は森川町に接す。地勢は其の名の如く高阜なり。地區を劃して一番地より六十四番地と爲す。

◎町名の起原並沿革

本郷臺町は丸山の内に、元菊坂臺町と稱せしが、明治二年本郷六丁目續横町及び喜福寺裏門前を併合し、五年に至り菊坂の二字を去りて今の稱に改む。

◎景況

當町の大半は旅館下宿業及寄宿舎にして其名稱等左の如し。

- 東京館 二番地
藤島館 四
尾崎と上 十四
關翠館 二十一
鶴榮館 二十五
第二菊富館 二十七
松風館 三十六
敷島館 三十六
美芳館 三五電下二四二一
眞盛館 三十八
大成館 四十一
福榮館 四十三電下二二三三

◎大善寺

大善寺は田町十二番地にあり。浄土宗にして知恩院未なり。本尊は阿彌陀佛、開山は嚴譽典領にて寛永元年本寺を創立し、其後天明六年二月六日火災の節記録焼失せりと云。整石を敷歩進めば門あり。扉は鑄鐵製にて、其の柱は花崗石なり。其の右に明治三十四年七月大善寺二十六世澤澤浄代建之と刻す。門内に日露戰役忠魂之碑を建てり。本堂は間口三間奥行五間なり。福田少年教會の札を掛く。左側は墓域にして興善寺と相隣す。

◎興善寺

興善寺は田町十五番地にあり。妙光山と號し、日蓮宗甲州大野本遠寺未なり。本尊十界曼荼羅。開祖は正行院日圓上人にて寛永元年の創立に係る。整石を進めば右側に靈夢高祖大菩薩安置と刻せる五尺餘の石標ありて、門扉は鑄鐵製にて井桁に櫓を表せり。門杭は花崗石にて、右柱に靈夢高祖安置、左柱に妙光山興善寺。其の裏面は明治三十二年五月吉日造之廿五世日孝代檀信兩施主中とあり。門を入れば右側に一柳樹あり。其下に一碑を建て俳句を刻す。左側に石佛を安置し、其傍に二株の栢榴樹ありて、丈一尺五寸餘の淨行菩薩の石像を安置す。洗滌の餘光澤あり。此に並びて一個の嗽石盤あり。奉獻妙光山十八世日順代文化十堯百年五月と刻す。傍は水行場あり。本堂の階下左右に鐵製の水盤あり。た組天保十一庚子年四月と刻す。本堂は間口六間奥行五間半、素木造りにて瓦葺とす。奥院は間口四間奥行五間の土藏にて、高祖の像を安置す。本堂の表面外部に靈夢と題せる額を掲ぐ江山爲實書とあり。中部には高祖旭日を拜する畫額文化辛酉年曉雲燈と署す。其の他數額を連ぬ。又堂内奥

◎本郷田町

本郷田町。東は市三尺の溝を隔て菊坂町に接し、西は大道路にて小石川區に隣し、南は本郷眞砂町に連り、北は駒込西片町の高草地を背ひ、福山町に連る。地勢は低窪なり。地區を劃して一番地より四十五番地と爲す。

◎位置及地勢

本郷田町は丸山の内にして、むかし菊坂田町と稱せしが。大道路にて小石川片町、丸山田町を併合し。同五年に又附接の土地寺地をも併せ、今の稱と改む其中舊片町は之を川勝前と曰ふ。元川勝氏の邸ありしに因れり。

◎町名の起原並沿革

當町の過半は商家櫛比せり。而して一番地には野尻米店、八番地には尾張屋質店、四十番地には内科小兒科熊谷醫院、廿八番地には内外雜貨店仲天堂、十四番地には蕎麥屋光月、三十番地には靈夢殿の額を掲ぐ阿部正弘の書する所なり。毎日午前八時より九時まで午後四時より五時まで當寺に於て法樂加持をなせり。

◎景況

本郷森川町。南は本郷菊坂町、本郷臺町、本郷六丁目に接し、東は本郷元富士町に面し、北は駒込東片町に、西は駒込西片町に隣り、地勢大概ね高燥なりとす、只西南の一角、陥入して谷となり、西片町との境界に沿ひ、蜿蜒東北に走りて盡く、左右高低あり、番地の區劃、第一番地甚だ廣くして全町内の約四分の三を占め、其餘を細別す、五十五番地まであり。

◎本郷森川町

◎位置及地勢

本郷森川町は、もと森川宿といへり、岡崎藩主本多氏の邸地と並に先手組屋敷なりしを、明治五年併合し、俗稱を以て町名となす。

◎森川宿

舊先手組屋敷は、昔時森川金右衛門氏後の組下與力同心の大繩屋敷にて、森川氏の邸宅も其内にあり、且又與力は大抵森川氏の親屬にて、同く森川氏と稱せしかば、遂に森川宿の唱起りしなりと、その宿と云へるもの、當時申仙道の建場なればなり。

◎本多邸内の諸字

森川町一番地は、前記の如く、町内の約四分の三を占め、子爵本多家の所有地にして、邸宅の外、殘らず貸地とす、戸數五百皆同番地なり、因て字を設け、號數を以て之を算せり、其字、北表通、北裏通、南表裏、南裏通、中通、宮前、宮裏、新坂、南坂、牛屋横町、油屋横町、椎下、橋通、橋下、谷、新開

宮前宮裏とは邸内鎮祀映世神社の表裏にして、牛屋横町、油屋横町は其名の如く、又椎下は本多邸圍裏椎ノ木あるの邊をいひ橋通橋下は谷に架せる空橋を指し、新開は近年最も後れて開けたる地なり。

○大學前

町内東南の一角は、帝國大學の正門に面し、片側町なり、俚俗大學前と稱す。

○景況

本郷通街は、東部に於て町内を貫通し、駒込退分に至る、中仙道の大達なり、其表通りに面するの地は、南の方大學前の片側町をなせるも、北部に於て兩側となり、商家櫛比、其賑賑なるや本郷大通りに次ぐ、地、帝國大學及び第一高等學校に接し、學生の需用品、多く此所に需がる、森川三等郵便局(一番地)、喜多床(同番地、電話二八二二)、パラダイス(同番地、電話二、三九〇)、順天堂(同番地、電話二、六〇)、美濃屋(同番地、電話二、三三二)中央貯蓄銀行本郷支店(同番地、電話二、四九)、中村屋(同番地、電話二、一七)、日本力行會支部(五番地、電話二、七六)、小佐井民之助(同番地、電話二、九三)、武藏屋(十六番地、電話二、三三七)、小松屋(同番地、電話二、二六)、佐藤庄助(十七番地、電話二、五九九)、今井大助(同番地、電話二、二二六)京瓦斯株式會社本郷出張所(十九番地、電話二、四九四)、伊勢久(同番地、電話二、二八五)、岡野金次郎(三十番地、電話二、七九)、松屋(三十九番地、電話二、三〇)、吉村屋(四十番地、電話二、一七〇)等、孰れも表通にあり、又育成會(一番地、電話二、四一四)は橋通に、守屋新聞賣捌店(同番地、電話二、二九)、消防第四分署管内第一番組組頭松島彦八、森川町一番地差配所は宮前にあり、表通を除くの外、一般に邸地に於て、子爵本多忠敬(主五萬石)を首め、子爵本多貞吉(主一萬石)、子爵本多忠彦(主三萬石)邸あり、又早川龍介、那珂通世、

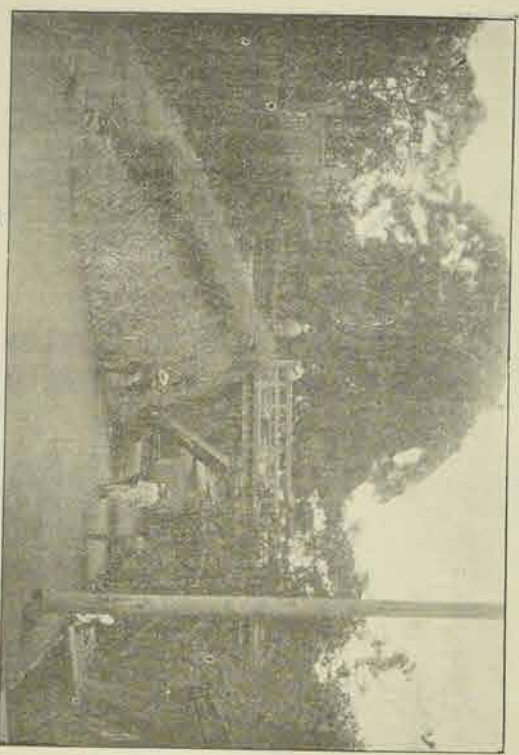
木下正中、關根正直等名家の居宅多く、公證人菅原良三郎役場(一番地、電話二、三五)、辯護士關口小一郎(同番地、電話三、〇〇九)、旅館新泉館(同番地、電話三、四三三)、本郷旅館、其他下宿屋多し。

●映世神社

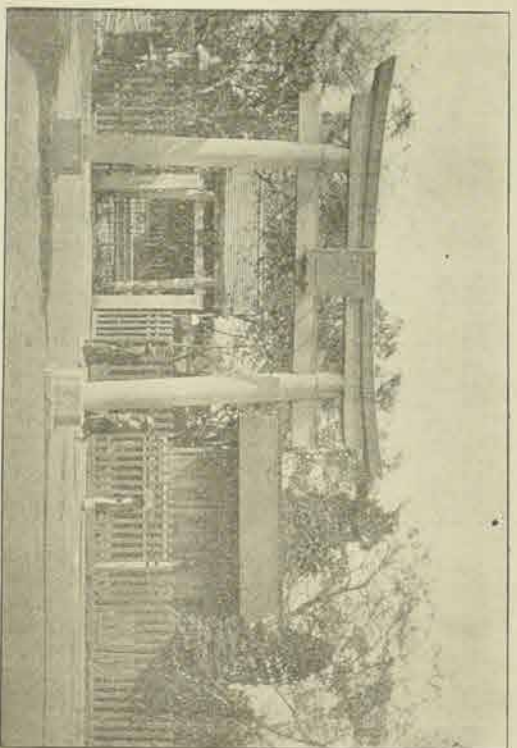
映世神社は森川町一番地に鎮座す、子爵本多家の祖、平八郎忠勝の靈を祀り、石の鳥居あり、玉垣を繞らし、門扇固く鎖して、社頭櫻を栽う、祭典は毎年十月十八日にして子爵の參拜又代拜あり、衣冠束帶、神馬を牽き、一同甲冑を環き、陣太鼓の音、勇しく、古式の行列あり、尤も典雅。餘興として神樂執行當日に限り、諸人の參詣を許すなり。

●谷

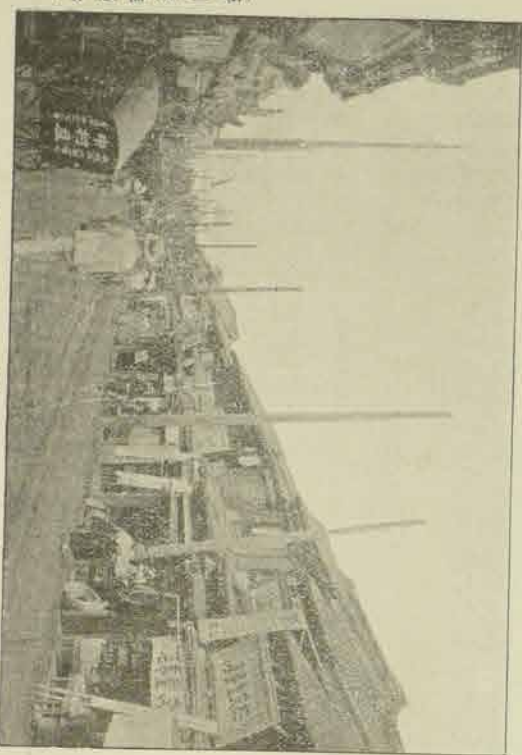
本郷森川町一番地(本多邸)と駒込西片町十番地(阿部邸)との間俄然として陥入し、窪みて谷を成せり、沮如濕穢、南の方田町に連なり、北に及びて盡く、別に呼名を有せず、森川町の字に谷といふもの即ち是れなり。細流一條、源を町の東北向ヶ岡の邊に發し、近傍の下水を併吞し、西、南、南の方向を取り、田町に注ぎ、菊坂の下水と會し、田町と眞砂町の境界を流れて、小石川大下水に排出す。流に沿ふて遡るに、左右丘陵崛起して谷間道斜に通ず、頭上板橋を架せり、人馬橋下を歩す、奇觀と謂ふ可し、以て駒込、森川通街に達す、此邊二十年前まで雜木山と竹藪にて人家なく、大弓的場と釣堀と水草生ふるのみなりしに、明治二十三年林叢を開發し、茅茨を刈り、竹根を除き、懸崖の眺望佳なる邊、新築家屋の木道を聞きしに、爾來土工日



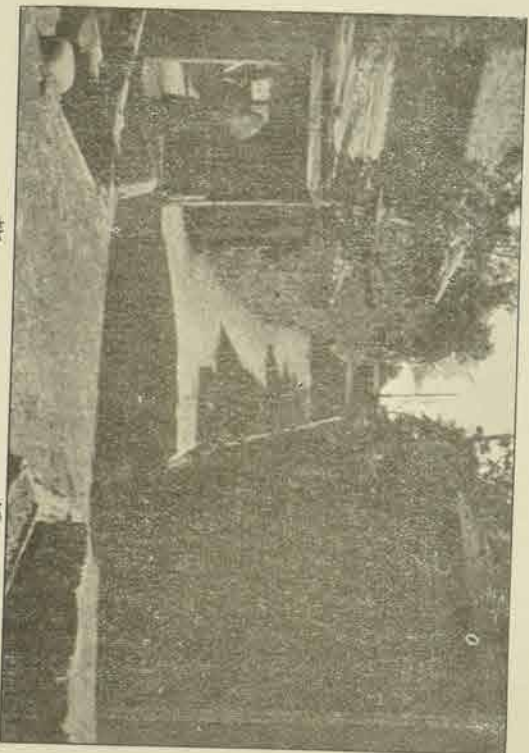
橋水清



社神世映



町川森



坂新

(坪川辰雄撮影)

に頻繁にして、十年間を出でず、人家簷を接して、併を一變するに至れり、所謂谷、橋下、新開の諸字は町内最も後れて開けたる場所なり。

清水橋

清水橋は本郷森川町と駒込西片町との間、左右丘陵に通ずる木橋にして、谷に架せり、橋下に人家あり、車馬往來す、高架橋なり、俚俗空橋と呼ぶ、町内橋通、橋下の字あるもの、此橋を指せるなり、橋柱に「三十九年九月成」とあるものは架換の年月なり、橋邊に櫻樹數株あり。

新坂

映世神社々東を斜に南西に通ずる一路あり、其窮る所、坂あり、谷に下る、新坂といふ、谷の口にて菊坂下、田町に通ず。

大榎

南堀にあり、往時本多邸内の境界線に植置きしものといへり、今其二本を存す、一本は路傍に（電線架設の際）、一本は宅地に圍込まる、又境界標石あり、半ば土中に埋ると雖も、本多家の所有地とし、臺町との境界を保つ。

憲兵屯所跡と島田蕃根翁

森川町橋通りに、嘗て憲兵屯所を置かれたり、屯所引拂の後、故島田蕃根翁（藩士）其建物を購ひ、改築して居宅となす、翁は晩年、居を小石川原町一行院の傍に移し、閑日月を消し、以て永眠せり、故宅には息友春（畫家）居住せり。

本郷基督教會堂

本郷基督教會堂は一番地の東北隅、表通の角にあり、此敷地もと壬辰義塾といへる獨逸語教授の建物ありしが、火災に焼失して、後ち方今の會堂建設せらる。

森川金右衛門宅跡

舊幕府御先手組頭役森川金右衛門の宅址は、今の向ヶ岡彌生町一番地、即ち第一高等學校敷地の一部分にて、同校時計臺の邊なり、又組下與方同心の宅地は東側森川町三番地より二十九番地までと、西側三十番地より五十五番地まで（西詰に御徒組屋敷交はる）なり。

夜市

電車の開通以來、本郷通の夜市を大學前に移す、軌道の敷設なき四丁目藥師の邊より五丁目、六丁目を経て森川町の南に達す（北は道路狹隘の爲）繪葉書、古雜誌、瀬戸物、袋物、銀ながし、九星即斷、片側に連なりて、行客の足を停む。大學正門の北、廣街の行話まる所、時々救世軍の屯して、傳道説教せるあり。

乗合馬車

本郷四丁目以北電車を通せず、森川通街は中仙道の要路なり、乗合馬車の往復するを見る、馬車は神田萬世橋を起點とし、北豊島郡上板橋に達す、森川町の北、追分の邊は、牛馬車、荷車、人力、自轉車、右往左返、道路狹隘にして交通頻繁なり。

丸山福山町

◎位置及地勢

丸山福山町、東は駒込西片町の丘陵を負ひ、南は本郷田町に、北は丸山新町に連なり、西は小石川區指ヶ谷町、掃除町、柳町に界す小石川指ヶ谷町接壤せる低地なり、地形南北に伸び、蜿蜒として長蛇の如く、以て西片町の丘陵を繞る。番地は一より二十五に至る。

◎町名の起原並に沿革

丸山福山町は、往時阿部家（主計頭と稱す、備後）の土地なれば、もと阿部土地と云ひしを、明治五年八月此稱を加ふ、福山とは阿部氏舊城下の名にして、廣く世に知られたるに因る、伯爵阿部家

の邸は、方今猶ほ駒込西片町にあり。

◎景況

大率邸宅なるが、近年漸く町家と化せし所あり、二番地に旅館東櫻館(三、二六)、七番地に辯護士關幸太郎(二〇一)、十三番地に同岩瀬孝事務所あり。

◎大下水

小石川白山下より來り、西片町の西麓を迂回し、丸山新町、同福山町を経由し、末は本郷田町、小石川柳町に注ぐ、大下水あり、兩岸コンクリートに固め、幅一間深さ五尺を踰ゆ、水源は池水なり、小石川原町酒井伯爵邸内に發し、平山、穂積兩箇の池の剰水を准し、白山の麓に至り、駒込曙町よりする土井子爵邸内の池水を合し、近傍諸町の下水を呑み、滔々南下す、雨後毎出水の災あり、近年排水の工事成りて、此患熄みにき。上流下流に至りては目下工事中。

◎丸山新町

◎位置及地勢

丸山新町、南は丸山福山町と駒込西片町に連なり、東は駒込東片町に、北は小石川區白山前町に隣り、西は小石川指ヶ谷町に接せり、地勢高低相半せり、即ち東半部は駒込西片町續きの丘陵隆起し、西半部は窪地となり、以て小石川指ヶ谷の低地に接壤し、下水を以て境界となす、方形に類し、番地は一より四十三に至る。

◎町名の起原並に沿革

丸山新町は、往時阿部家(後福山藩)の邸にして、丸山屋敷と云ひしを、元禄年中上地となし、幕府の醫師又は小人などの受領町屋敷となり、始めて町名を加へたり、明治五年八月附近の土地を合併す。

◎景況

東の方駒込東片町に面するの地は、中仙道の通街にして、白山前町に續き商家相接せり、白湯大鏡泉(一番地)蒲燒商川鐵(二番地)女醫篠田せい子、米穀商松井勇藏(十三番地)等あり、西の方崖地及び西片町に接壤するの地は率ね邸宅地なり中通り十八番地に棚橋一郎の待風舎あり。

◎胸突坂

丸山新町と駒込西片町との界にある坂を胸突坂といふ、坂路急峻なり、因て此名を得、左右石垣にて、苔滑か。

◎中坂

胸突坂と淨心寺坂との間に坂あり、中坂といふ。

◎駒込の稱

駒込とは、往時野牧のありし所にて、駒の多く群がりたるさまより起れるなるべし。

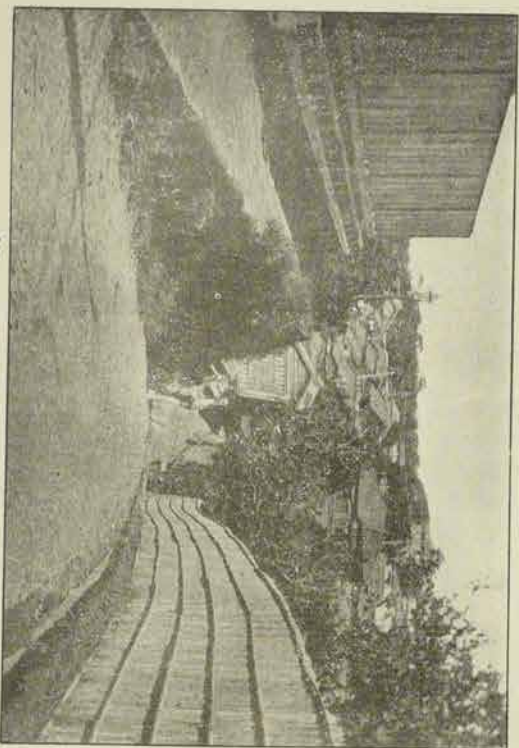
江戸砂子に云、日本武尊東夷征伐の時、高きより味方の勢を御覽じて、扱も駒込たりと宣ひしより名付しよし、根津縁起に出たり。

とあれど、信じ難し。

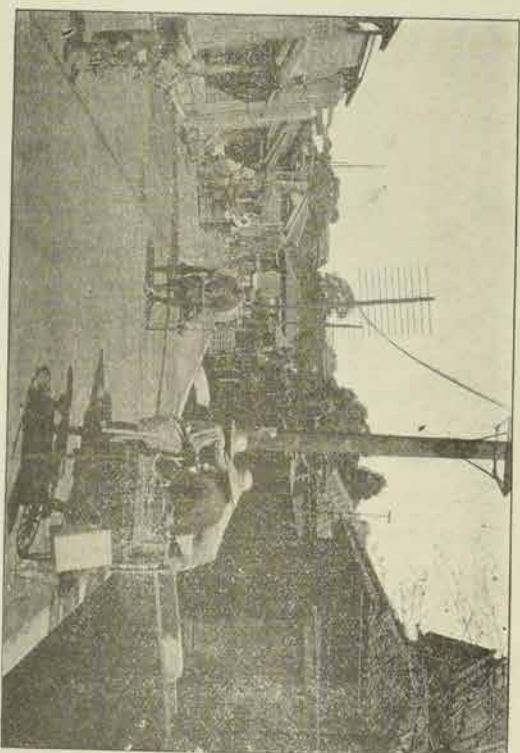
新編江戸志(三)に、或説にいふ、江戸砂子の説ひが事なり、こむといふ事古代の語に見えず、殊に此邊に山もなく、望み給ふ所あるべからず、駒込牛籠など、みなむかし牧養の所なるべしとなり。按ずるに此説可ならんか、牛込駒込などむかし牧養の地ならむ、北條分限帳にも駒込の名あり。江戸名所圖會(十五)駒込の傍訓「コマゴメ」

今「コマゴメ」と呼ぶなり、其區域極めて廣く、

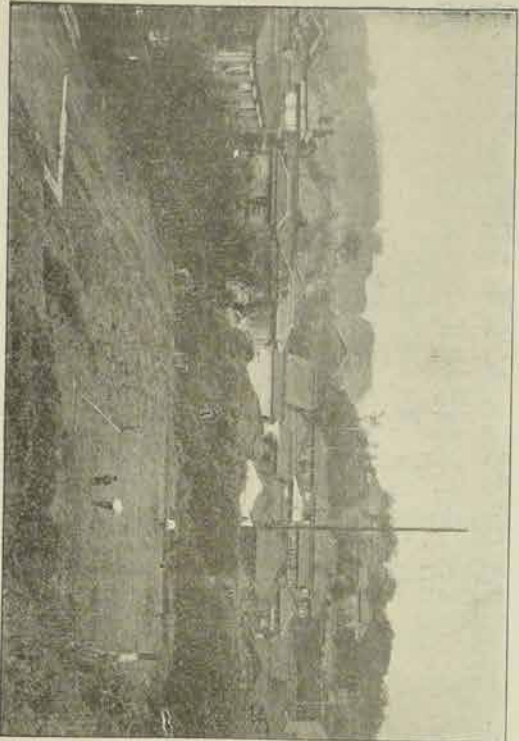
西片町、東片町、追分町、蓬萊町、肴町、曙町、片町、富士前町、上富士前町、淺嘉町、吉祥寺町、神明町、動坂町、千



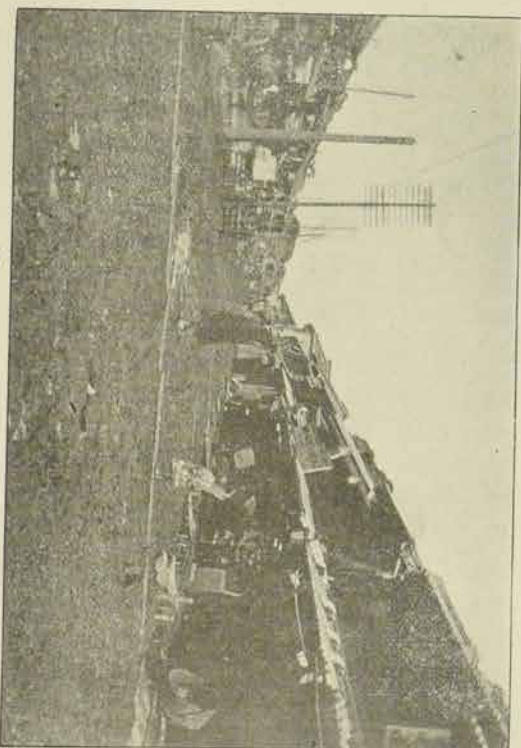
坂 園 炭



町新々よ町山福山丸



望遠邊山丸町田



町 田

(坪川辰雄撮影)

駄木林町、千駄木坂下町、千駄木町
以上十六箇町を包有し、南は本郷、根津、西は小石川、北は巢鴨、東は谷中邊に接界せり。

●駒込西片町

◎位置及地勢

駒込西片町、南は本郷田町に、東は本郷森川町に接し、西は丸山福山町に隣り、北は丸山新町及び駒込東片町に連なる、本郷臺の一脈、西に隆起して、高燥の地なり、番地は一より二十九に至る。

◎町名の起原並に沿革

駒込西片町は、往時福山藩阿部氏邸及び幕府の徒組屋敷、諸士居住の地にして、俗に東片町向側とのみ唱へ來りしに、明治五年八月新に町名を加ふ。

◎イロハ號

西片町十番地並に二十三番地以下、悉皆阿部伯爵家の所有地なり、其區域甚だ廣く、南に伸び北を占め、全町内の約八九分通りを領せり、其面積前記森川町の本多邸に倍せり、本多邸は十六の小巷を設けて區劃せるが、阿部家所有の貸地はイロハ號を附せり、即ちイの一號は阿部伯爵の居邸にして、ロハニと算し下に至る、されば此邊番地の記憶のみにては、辨別し得られず迷ふもの多し。

◎景況

町内の八分通りは阿部家所有の貸地にして、官吏、學者の家居多く、悉皆邸宅地なり、伯爵阿部正桓は十番地イの一號地に本邸を構へ、元良勇次郎、坪井正五郎、馬場憲治、中川謙二郎、岡本英太郎、中根淳藏、岡田朝太郎、野口保興、大塚保治、安廣伴一郎、大幸勇吉、山極勝三郎、片山國嘉、的場中、高橋作衛、近藤虎五郎、

田中稻城、三好學、土方寧、中島鏡治、中山秀三郎、夏目漱石等の諸氏あり、又十三番地に高松豊吉、十六番地に手島精一兩博士あり、並びて中仙道通街に基督敎駒込教會、寄席鈴木亭、菓子舖伊藤邑(九番地)、鳥肉鶏卵井河屋(十番地)、疊職青木、飴商石井丈吉(二十一番地)等あり、祠宇あり本郷祠(三番地)といひ神道修成派に屬す、學校あり、誠之小學校(十番地)といふ。

●石坂

町内より南の方本郷田町に下る坂あり、石坂と呼ぶ。

●新坂

町内より西の方、小石川掃除町に下る坂あり、新坂といふ。

●椎の木

阿部伯爵家門前の廣場に椎の大木あり、柵を繞らし、幹に注連繩を張る、阿部家中屋敷の頃より此地に存在し、老幹數圍、枝葉繁茂す、蓋し木の怪なり。

●神道修成派本郷祠

神道修成派本郷祠は、本郷駒込西片町三番地に鎮座す、明治廿五年の創建なり、鳥居一基、表道に面す、敷石一條あり、以て拜殿に達す、拜殿檜皮葺、千木高く、間口五間半、奥行四間あり、階前に鐵釜鐵桶を積むもの一對、傍に碑あり「修理固成光華明彩、新田邦光書」碑陰に「神道修成派別派獨立以來二十五年祭爲紀念有志者建碑之、明治三十四年十月廿三日」と鐫す、祭神神皇三靈、伊冊諾尊、天照大神、天神地祇八百萬神、別祭神大己貴神、少彥名神とす、右に神樂殿あり、例月二十三日神樂執行、大祭は十月なり。

修成派本部は埼玉縣北足立郡與野町にあり、當所は其出張所なり、元細長き地所にて、祠は表通りに、教會は其中通を隔て、奥まりたる所に分立別設せられしが、斯くては不便少からず

因て隣地と交換し、今や移轉工事中なり、當祠宇俗に御嶽神社と稱すれど否らず、御嶽は別祭神に過ぎずといへり。

市立誠之高等小學校

市立城之尋常高等小學校は、駒込西片町十番地阿部伯爵所有地に左の契約と寄附とを以て、明治八年十月三十日創立せられ、第四中學區第十三番誠之小學校と名づく、敷地三百六十七坪五合(五十箇年無地料)、校舍九十三坪二合五勺、器具新調費悉皆阿部伯爵家の寄附に拘はる(明治二十二年六月迄月々若干)、十一年十一月小石川本郷兩區の共同管理に屬す、十二年八月裁縫教室及事務室等十四坪五合を増築す(阿部伯爵附)、十五年五月教室其他四十坪五合を増築す(父兄の寄附)、十六年一月小石川區の管理を離れ本郷區に專屬す、十七年十月敷地百坪を借り擴げ教室三十三坪を増築す(費)、十八年九月敷地百坪を借り擴げ兒童昇降口等六坪一合餘を増築す(阿部伯爵附)、二十年六月一教室を假用して幼稚科を設く、二十一年六月敷地三百五十坪を借り擴げ幼稚園開講室其他四十六坪を建築す(區費及)、明治二十三年二月十日、聖上皇后兩陛下の御眞影を下賜せらる、二十三年十二月教育に關する勅語謄本及文部大臣訓示を頒布せらる、二十四年一月校舍を改築す木造二階家百七十八坪七合五勺(區費及)二十五四月教室三十六坪を増築す(區費及)、二十五年八月幼稚園附添人控所二坪二合五勺を増築す(費)、二十八年四月物置四坪を増築す(費)、三十年十一月同番地ホの七號の地域三百十坪九合餘を借用し、附屬幼稚園を新築して之に移轉す(校費及有)、同年同月、聖上皇后兩陛下御眞影の複製を願ひ附屬幼稚園に奉戴せり、同時に教育に關する勅語謄本を下賜せらる、三十五年東京府教育品展覽會へ出品し同會より貳等褒狀を受く、又同會へ、皇后陛下行啓の節本校兒童成績品の内十七點、御思召に適ひたるを以て獻納せり、創立

以來の校長は、藤田利勝、市川雅筋、小谷某、藤田虎雄、平野長徳、成瀬勝文、杉浦恂太郎の七氏にして、杉浦氏目下之が校長たり、創立の當時は校長外教員二人にして、在學兒童九十六人なりしが、現今は職員(三十九名)校長一人、訓導二十一人(男十七)保母五人、學校醫一人、事務掛一人、計二十九人、又兒童數並幼兒數(同上)は尋常科男三百四十四人女三百二十二名、高等科男二百二十三人、女二百二十八人、幼兒男八十五人、女六十九人、合計千二百七十一人なり、

校訓

- 一 何事も誠にてせよ
- 一 よく勉めよく遊べ
- 一 きまりを守りいひつけに従ふべし
- 一 何事も元氣よくして人にたよるな
- 一 一人には親切にすべし
- 一 我が國をおもへ
- 一 たのもしき人となれ

校歌

中村秋香作歌

まことはやがて
 誠はやがて、天の道
 人の道とは、いふなれと
 二 段
 そを名に負へる、此場に
 朝な夕なに、時の間も
 三 段
 誠を履むは、いと易し
 唯一筋に、努めつゝ、
 爲すべき事を、いそしみて
 心の限り、盡すのみ

四 段

君に仕へて、一すぢに
 親につかへて、一すぢに
 心を盡すを、忠といひ
 力を盡すを、孝といふ

五 段

何事となく、一すぢに
 外に心を、移さぬが
 爲すべき業を、つとめつゝ、
 やがて誠を、履むの道

六 段

學ぶ時には、よく學び
 これぞ誠を履むの道
 遊ぶ時には、能く遊ぶ
 人の道なり、天のみち

駒込東片町

◎位置及地勢

駒込東片町、南は向ヶ岡彌生町、本郷森川町、南は駒込西片町、本郷丸山新町、小石川白山前町に面し、北は駒込曙町、駒込片町、駒込浅嘉町に隣り、東は駒込香町、駒込追分町に接す地形蜿蜒として南より北に伸び、中仙道に沿ひ、長く帯に似たり、率ね高燥なりとす、番地は一より百六十二に至る。

◎町名の起原並に沿革

駒込東片町、往時駒込村の内なり、寛永中、村内率ね藩邸土地となり、村民は中仙道の東側に移り、僅に市廛を開く、當時片側町なるを以て、駒込片町の稱あり、明治二年徳性寺門前、九軒屋敷、追分町の殘地を加へ、東の字を冠して以て西片町に別つ、五年又近傍の土地寺地を合併せり。

◎景況

中仙道の通街にして商家相連なる、東の方追分の邊、西の方白山の邊、殊に繁華なり、酒商高崎屋(八番地)、呉服商玉屋(九番地)、女醫問宮八重(六番地)、駒込郵便局(五十五番地)、竹商佐久間(六十九番地)、材木商板木屋(同上)、酒商美濃屋小泉、

榎町

東盛銀行(七十六番地)電下二二小間物商尾張屋、洋品店増屋、葉茶屋大阪屋、藥舖松古堂(八十番地)電下二二九菓子商吉野屋、牛鳥肉三河屋(八十二番地)料理店萬金樓(同上)等ありて、俚俗榎町に接續す(榎町の事、別に記あり)、七箇寺院あり、大圓寺、正念寺、徳性寺、龍光寺、潮泉寺、一音寺是れなり、又中通の邊には長岡半太郎(百十番地)、池田菊苗(百二十七番地)大澤謙二(百三十一番地)、神保小虎(百三十八番地)、田口乾三(百五十四番地)、白井遠平(百五十七番地)、緒方正規(百六十六番地)等諸邸宅あり。

◎竹町

小石川白山前町より駒込蓬萊町、團子坂に通ずる東片町の内、肴町、浅嘉町の左右交錯して、中仙道と奥州道との連絡をなせる小繁華の地を俚俗榎町と稱せり、長さ漸く町許に過ぎずと雖も、呉服商三軒(ふじや、ちどりや、正直屋)、小間物商二軒(かしはや、田中屋)手遊具二軒、八百屋三軒、洋燈商二軒、其他剪花商(鈴木松藏)、牛鳥肉(石田屋)、瀬戸物類、洋傘、下駄傘、萬清物、藥舖(松壽堂)、文房具紙類、袋物、貸本、湯屋(山本)、理髮業、雜貨商(三好屋)等、百般の日用品、一として缺くるものあらず、皆之を辨すべし、駒込白山邊、唯一の商業地となす、例年の立、草市開かれ、又夜市を張る、寺院あり一音寺といふ。

町の裏通にて又奥州道に會す、正念、徳性、潮泉各寺院あり、南は萬金の裏、北は淺嘉町巡查派出所の傍に出づ、淺嘉町の青物市場を土物店といふ、因て此名あり。

各寺院

●大圓寺 駒込東片町六十六番地にあり、金龍山と號す、曹洞宗通幻派の大本寺にして、上州邑樂郡館林茂林寺の未派なり

久山正雄大和尚(寛永七)を開山とし、慶長二年神田柳原に創建し慶安二年此地に移る、堂後に仁徳天皇御陵と言傳へたる古塔あり、門前に炮烙地蔵あり、墓地(六十)に高島秋帆の墓あり。

●正念寺 同八十五番地にあり、光蓮山常照院と號す、浄土宗深川靈巖寺の末寺なり、寛永五年創立、三譽上人諦岩和尚の開基なり、十一面觀音を安置す。

新編江戸志(三)に、略縁起云、越後國妙香山の麓、關の山と云所の櫻の控より出現の靈像なり、ひかし越後國戰國の時國中の寺院兵火の爲灰燼となり、如何なる寺の僧とも知らず此像を負て走る、口へすむ所無之ゆゑに、控ある櫻を幸に尊像を隠して去る、その後此木より光明を放す、里人奇異の思ひをなし、彼櫻の傍に菴室を建て、尊像を安置す、當寺開山三譽諦岩の時、不思議の告ありて笈に徙し守り來ると云々。

山手三十三番札所の第十七番にして、山城六波羅堂の寫なり、住職濱島教山。

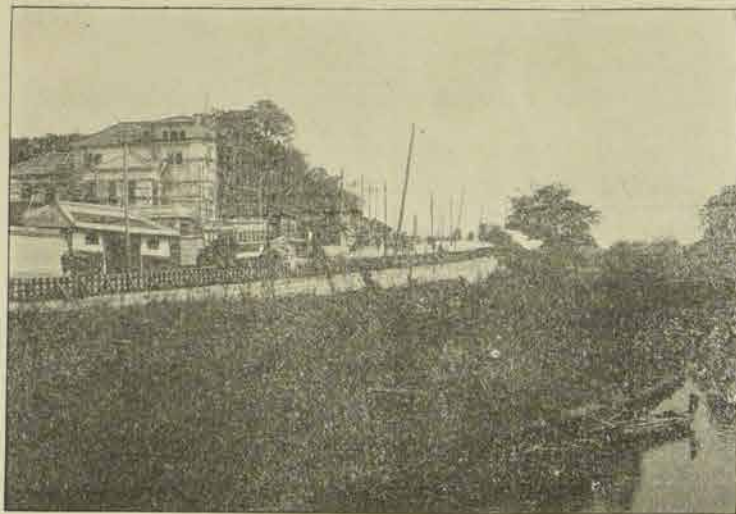
●徳性寺 同八十九番地にあり、本然山淨閑院と號す、浄土宗本庄靈山寺の末寺なり、廓譽材念上人を開山とす、身換地蔵安置惠心僧都作といへり。

●龍光寺 是同九十三番地にあり、天澤山と號す、禪宗東福寺の未派なり、住職松井千珠、寺門南に面す、右柱に「臨濟宗事務出張所」、左柱に「臨濟宗圓覺寺派、永源寺事務出張所」の

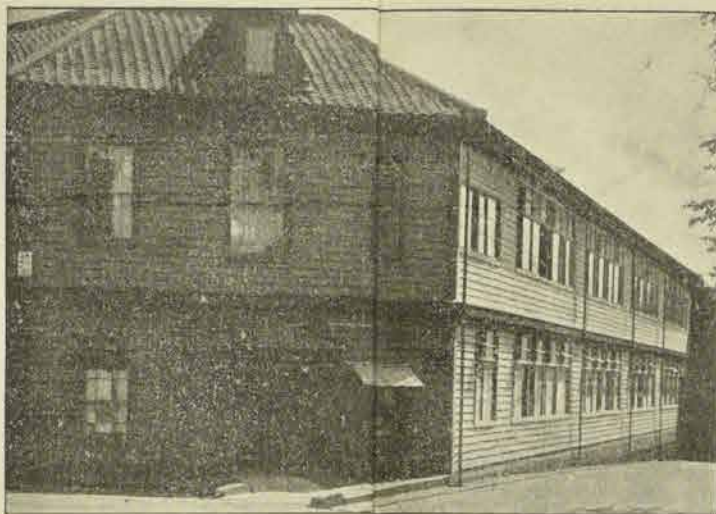
牌あり、傍に門番所を置き、門内本堂庫裡玄關に通ず。當寺は伊勢國阿蘇郡神戶町天澤山龍光寺の分寺なり、伊勢龍光寺は後花園天皇永享二年勅願所となれり、中興第二十五世虎伯大宣禪師、寛永の初め大猷公の台命を奉じて江府に來り、芝金地院に於て碧巖縁を提唱せるに、公も屢次肩輿を寄せられ諸問する所あり、伊勢國龍光寺と同格の待遇を受く、又官醫大橋隆慶法印(其御牛込にあり今尚)素交あるを以て、遂に其宅畔に小菴を結ぶ、後官地若干(今の赤來)を賜ふ、當時閣老安藤右京進、松平

讚岐守、藤堂大學頭、同佐渡守、小笠原兵部次郎、同壹岐守、京極備中守等各其第に請して道要を問ふ、就中京極氏小笠原氏は永く桓越の約を結び、墳墓を托するに至る、實に寛永九年なり、爾來茲に住すること二十五年、明歴二丙申年官故ありて此地を酒井若狹守に賜ふ(俗に矢來の酒井といふ)即ち代地として今の地を拜領再營す、後享保十八丙申年三月類焼、古記録大半燼失し由緒詳かならざるも、大猷院より歴世昭徳院に至る迄、將軍薨去の時は、厭經拜禮、施物を拜領し、將軍嗣立の節は時服一領づ、拜領すること長く例なりき。

△金毘羅大權現 境内東南の一隅に鎮守堂あり、金毘羅大權現を勧請す、尊大(像)は元祿年間讚岐國丸龜城主京極家寄附の神體にして、明治初年に至るまで今の地に社殿を建て、崇敬したるも、神佛混淆禁止の達令に基き、一時社殿を取崩して世の惑を避けたるが、素と金毘羅大權現は佛教中のものなれば、明治十二年に至り宮の允を得て、社殿二間三尺を復舊し、例月十日祭典を執行し、諸人の參拜を許すこと、なれり、方今商人の都合あればとて一日繰延べて十一日となす、又住職の話に、今の虎の門琴平神社も明治初年京極家の縁故にて其管理方を同家より當寺に依托せられしことあり、又當社再興の際、琴平神社は殊



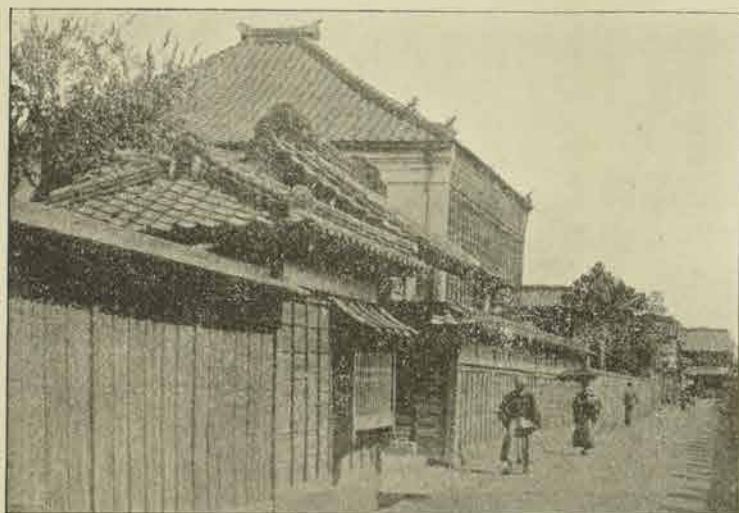
坂水の茶お



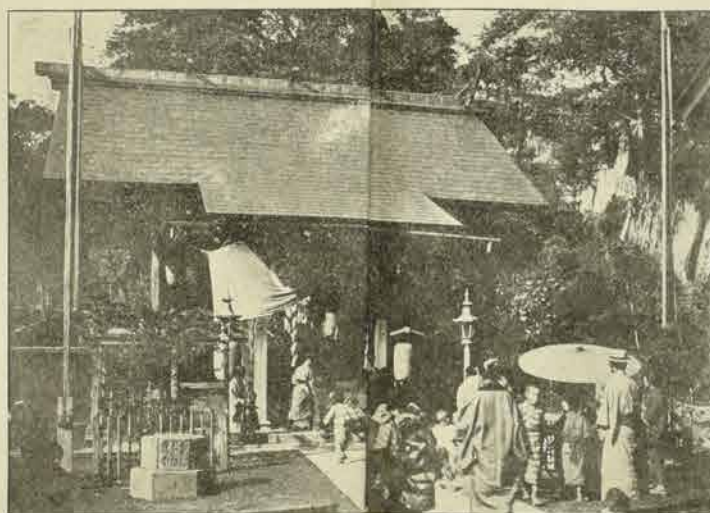
學中華京



亭竹若



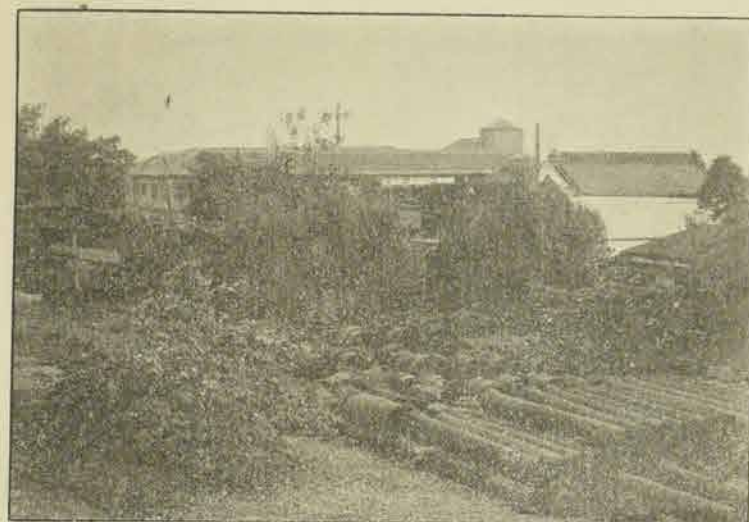
寺念三



殿拜社神比刀金



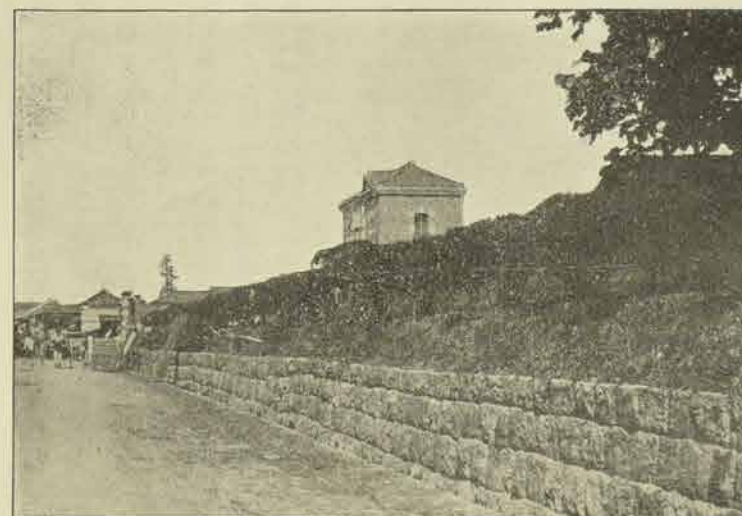
社神羅比刀金



場置管鐵道水同



部内場水給同



場水給郷本市京東

に建設費を資助せりし。

堂前に石の鳥居(明治十七年二月石工)を建つ、又神樂堂(三間に三間、

新築あり、内陣に金毘羅大尊天の縦額掲げあるにも拘らず、金

刀比羅神社と信じて奉納せるものにして足らず、寺僧の與り

知らざる所といへど、神佛再び混淆するなきを欲す、敢て信徒

に告ぐ、尊天は佛なり、紅白の餅を供する勿れ、佛は神供を饗

けざるなり。

△摩利支天 鎮守堂に安置す、元の泰定三年(本朝嘉暦元年)

福州の人清拙大鑑禪師渡來の時、護持して之を建仁寺塔中に鎮

座せし尊天の分體なり、明治十八年迎へて之を勸請す。

△境内 本堂七間三尺書院六間 庫裡五間 土藏一間三尺等ありて

境内狹からず、庭に萩を植ゑ、池あり、又楓樹あり、西隣曙町な

る土井子爵の邸地に接して、満庭の秋色坐るに雅致あり。

△墓地 九十五番地は其墓地なり、名家の墳墓多し。

三宅觀瀾、栗山潜峰、稻葉迂齋、鶴飼稱齋、中邑元禮、鶴飼

金平、坂井伯元、莊恬逸、恩田鶴城、餘吾古菴、

△髭の自休 深見重左衛門、本姓は深溝、名は直國、初の名

は十藏、其祖父は福島正則に仕へ、一方の將たり、重左衛門主

家滅亡の後 藤堂大學頭(藤堂)に仕へて高祿を食む、後ち致仕して江

戸に住す、任俠を以て其名高し、嘗て捕へられて隠岐に流さる

配所に在ること三十年、赦に遇ひて江戸に還る、即ち剃髮して

名を自休と更む、時に年八十、然れども鬚髯として氣力壯年に

譲らず、常に鐵鞭を携へて歩行す、義齒を作るに上鬚は金を以

てし、下鬚は銀を以てす、庵を當寺に結び、享保十五年三月十

八日、年九十にして此に歿す、墓あり、前面「一應院心溪自休

庵之墓」左側「享保十五庚戌稔三月十八日」右側「俗名深見十

左衛門」と鐫す。

●湖泉寺 同町百零一番地にあり、増上山三行院と號す、淨

土宗芝増上寺未派なり、僧寂譽(寛文三)開基す、創建年月詳かな

らず、一光三尊善光寺如來(日本四十)を本尊とす、新編江戸志に

は開山明譽上人、七観音、縁引地藏、石佛と載せたり。

●一音寺 同町百零六番地にあり、佛以山得解院と號す、元

和二年神田に創建し、寛文の頃此地に移る、僧玄海の開基にし

て本願寺派なり、本堂總修葺工事中とす、慎町通に面し、門前

に大日本佛教圖書館掲示牌あり。

●駒込郵便電信局 駒込東片町にありて、五十四、五十五兩番

地に跨がり、中仙道の通街に面せり、二等局にして郵便及び電

信の事務を掌る、向側の丸山新町を俣俗郵便局前と呼ぶ。

●高崎屋 塞大神 酒類醬油商高崎屋は駒込東片町八番地にあり、舊家にて其名

知られたり、店主渡邊仲藏、電話下谷八三三番。傍に碑あり、

「塞大神」と鐫し、臺石に八箇町奉納と刻す、此地中仙道と奥州

道との岐る、所にして、方今猶ほ追分と稱せり。

●萬金 料理店萬金は駒込東片町八十二番地にあり、舊幕府の頃、中仙

道驛次の立場茶屋にして、東北諸大名の送迎休憩所に充てられ

白山の萬金と稱し、其名尤も著しかりしに、明治後、王政復古

と共に制度改革、此事絶ゆ、爾來普通料理店として營業持續せ

るも、屋號の繼承に過ぎず、屢次持主を改め、轉々して今の初

見に至る、初見は元と魚戸なり、通稱魚初とて本郷臺町に開業

し、菊坂に轉じ西片町に移り、昨年遂に前持主堀江金兵衛より

譲受けて店主となり、樓の一字を加へて萬金樓といふ、電話下

谷七四六番。

本郷名家の墓

大塚信輯

Table of graves with columns for name (e.g., 烈婦春日局墓, 名士齋藤立本墓), location (e.g., 本郷前岡町, 荒木吳江墓), and date of death (e.g., 天保十二年正月十四日歿).

Table of graves with columns for name (e.g., 篠田明浦墓, 僧由教墓), location (e.g., 本郷前岡町, 荒木吳江墓), and date of death (e.g., 安永九年五月十四日歿).

此廣告の見取御方は「風俗畫報」に據る御附記を乞ふ

獨逸人エーマン氏譯文

錦乃御旗

原名戊辰戰記畫卷

正價金參圓 郵税金拾六錢

全一冊 着色畫 四拾壹圖
美本 一尺〇三分
幅八寸

本書は明治中興の端緒なる鳥羽伏見の戰役を圖記せるものにして當時の實踐者たる林子爵及東久世伯爵の計畫に基き圖畫を改むる數十回歳を閱する六次にして明治廿二年始て竣成し原本を宮中に獻して乙夜の覽に供し同廿四年保勳會に於て其副本に戰記を附し之を會員に頒布したる非賣品なり弊堂今次同會と協議し圖畫に着色して一層の光彩を添へ獨逸人エーマン氏の譯文を加へ錦の御旗と題し廣く世の需に應ずることせり本書畫く處の服飾は遺物に徴し地理は實踐に取り一も想像に出るものなく戰役參與將校の審査を経たれば當時戰役に關する百般の状態一目燦然として時勢の變遷を觀るべく維新歴史の參考として諸學校は勿論家庭教育上に資するを得べし希くは明治聖代記念として御購求あらんことを

本書原圖を監督校閱せられたる諸華族の芳名

- | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 從三位 | 從三位 | 從三位 | 從三位 | 從三位 | 從三位 | 從三位 | 從三位 |
| 勳二等 | 勳二等 | 勳二等 | 勳二等 | 勳二等 | 勳二等 | 勳二等 | 勳二等 |
| 子爵 | 子爵 | 子爵 | 子爵 | 子爵 | 子爵 | 子爵 | 子爵 |
| 河田 | 吉井 | 東久世 | 友實 | 林 | 戶田 | 友幸 | 隆平 |
| 五條 | 河田 | 東久世 | 友實 | 高崎 | 正風 | 友幸 | 隆平 |
| 爲榮 | 爲榮 | 爲榮 | 爲榮 | 爲榮 | 爲榮 | 爲榮 | 爲榮 |

發行所

東京市神田區通新石町三番地

東陽堂支店

(電話本局九百七十番)
(郵便振替貯金 口座番 壹壹九〇六番)

此廣告の見取御方は「風俗畫報」に據る御附記を乞ふ

本品の特色は最も皮膚に有効なる原料を以て精製
製したる者なれば色白く肌を滑らかにし



プレスト スト 洗粉

(定價)
袋入 二錢
大入 五錢
罐入 七錢
同別 壹圓
本舖 東京 牛込
山本 玉川 堂

はしのぞんじょうやうこ廣告

貴顯紳士粹佳人の必用なる香料



東京星野の人造麝香
弊舖發賣の人造麝香は他に比類なき純良品にて高尚優美の芳香を放ち方今普く天下に冠たる高評を博したり此人造麝香を携帶せば總ての惡臭を防ぎ他人に對し身の省便となり惡疫の感染を豫防し衛生の夏季最も必用の佳品也
弊舖の人造麝香は香水香油石鹼及化粧品製造業者間に必用なる香料として歡迎せらるる近來種々の偽製品あり注意の上御求め

香具原料に用る 弊舖代用 大瓶六拾五錢
七匁五分入及び 小瓶拾五錢
一匁入は時價を相違し 新小瓶拾錢
以て精々勉めず 試用品拾錢
日本發賣元 東京市日本橋區 星野與兵衛
伊勢町十七番地
大坂市東區 武田長兵衛
地方一手販賣 道修町二丁目 小川安兵衛
代理店 同市同區道修町二丁目 小川安兵衛
全國到處の藥店並に小問店にて賣捌候
登錄商標御注意を乞

てんかんの最新薬

てんかん云へる病は其病源の解らぬより昔時不
治の病と稱へて一旦是れに罹れる人は自から癡
人となりたる如く思ひ他人も取合されば生涯交際
も出来ぬ状態なりしが醫道開け諸種の難病も全治
する今日には癲癇の如きも其病理を明せられ随つて
其病に卓効ある良薬も発見するに至れりされば今
日は如何なる難症のてんかんなりとも必ず全治
することあるは名醫の夙に唱道する所にして蘇神
丸とは即ち此新薬なり傳人と其病との關係を添よ

蘇神丸 薬價 百日分 金參圓(送料八錢)
三日分 金二圓(送料二錢)
本舖 東京市日本橋區 藥劑師 高木與八郎
研鑽町四十三番地

●壽美禮おしろい●ねり製●水製●西洋劑壽美禮あらい粉廣告



●登錄商標

すみれ白粉は歐米諸國に流行する香料及弊店特製の化學的炭水
素の新成液体等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗にし御顔
肌へを清々しく天然の色白きに至らしめ芳香馥郁として長時
保續し心神を爽快ならしむ故に衛生上有益無比の逸品にして且
高等優美御進物に適し益々上流社會に高評を博しつゝあり

●製造本舖 東京東兩國元 町兩國橋際 壽美禮堂謹製

定價(大場廿錢小場十二錢)

定價(大場廿五錢中場十五錢小場十錢)

定價 綠、藍、紅、彩、紫、香、い、諸、色、八、錢
別製鑲入五拾錢大鑲入二錢鑲入壹錢

すみれ洗粉は原料香料を撰擇し弊舖特有の伎倆を以て精製したるものな
れば能く皮膚のあかを落し御顔肌へを艶美ならしめ愛すべき芳香を放つ
之れを髪洗ひに用ゆれば毛髪をぬめり取り油あか等又半乾りハンカチ
ーフ、絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を潔白する特性あり◎使用法
は普通あらう粉の半分にて宜し水又は温湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の
際用ふるを良とす

◎新刊書◎

人生命名心法

至象庵 小關 金山 著

本書は姓名を以て人の吉凶を判断するの原理を説明したるものにして人生の生理より説き音聲の原理に及び天地の原理に考へて姓名を判断する占筮の法を簡明に説明したるものにして家庭命名には必要缺く可からざるものなり

全壹冊 正價金六十錢 郵税金六錢

蘆葉山人著自畫百餘圖挿入



和裝美本全二冊定價金壹圓六拾錢郵税金拾錢
著者は生粹の江戸ッ兒、生來六十年間親しく觀たるまゝを些のかざり氣なく寫し集めし年中一切の行事なり是を見れば幕府盛時の江戸風俗遺憾なく知るを得べし必ず備ふべき珍書なり

夜窓鬼談

石川瀧齋先生著 〇穗庵、楓湖、永濯、米徳伯密書

本書は碩儒瀧齋翁得意の快筆を以て怪談鬼話を蒐めたるものにて全編諷諷を以て骨髄とし怪談を藉りて皮相したるものなれば世教を益すること實に尠少に非ず冀くは一冊を綴て翁が其意の存する所を知り給はんことを

上全二冊 定價金二圓 送料小包二百匁迄

東京 神田 東陽堂 發行 所 石町 通新

定丹

定價 百粒入十錢 二百粒入廿錢 五百粒入五十錢 粒箱入五十錢

胸腹の痛を去り心患鬱閉を散じ頭痛眩暈嘔吐を治し吐瀉痢病を止め舟車魚肉の醉痰咳瀉酒の毒を忘れしむ殊に毎食後服用すれば食あたり食物停滯胃病の思なしく精神爽快ならしめ百事勉勵心を誘起せしむる良薬也同名又似寄偽薬數多有高價及いとや號に御注意を乞

本舖 東京市馬喰町 いとや又兵衛 三丁目着店

風俗畫報增刊

難福之部

難福之部

- 第三回内閣勸業博覽會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 京都大博覽會 全一冊 定價三十錢 郵稅一錢
- 日本婚禮式 上、中、下全三冊 一冊定價十五錢 郵稅一錢
- 鏡都三十年祭圖會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 豐公三百年祭圖會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 慶事集 全一冊 三十錢 郵稅二錢
- 東京勸業博覽會圖會 全五冊 一冊十五錢 郵稅一錢
- 新年の祝 全一冊 定價四十錢 郵稅二錢
- 原千代大祭圖會 全一冊 定價三十錢 郵稅一錢
- 大原千代大祭圖會 全一冊 定價三十錢 郵稅一錢
- 第五回内閣勸業博覽會 全二冊 一冊定價十五錢 郵稅一錢

風俗畫報所名

- 鎌倉名所圖會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 香取名所圖會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 東本願寺雜式圖會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 鹿島名所圖會 全一冊 定價廿錢 郵稅一錢五厘
- 御大喪圖會 上、下 全二冊 一冊定價十五錢 郵稅一錢
- 臺灣蕃俗圖會 上、下 全二冊 一冊定價十五錢 郵稅一錢
- 東京歲事記 上、下 全二冊 一冊定價十五錢 郵稅一錢

難福之部

- 雪況圖會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 足尾銅山圖會 全一冊 定價卅五錢 郵稅一錢五厘
- 郵船圖會 全一冊 定價五十錢 郵稅二錢
- 伊豆七島圖會 全一冊 定價三十錢 郵稅一錢
- 橫濱名所圖會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 成田鐵道名勝誌 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 江島名所圖會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 岐阜地震起聞 上、下 全二冊 一冊定價十五錢 郵稅一錢
- 臺灣土匪掃蕩圖會 上、下 全二冊 一冊定價十五錢 郵稅一錢
- 三陸海嘯被害錄 上、中、下全三冊 一冊定價十五錢 郵稅一錢
- 大洪水被害錄 上、中、下全三冊 一冊定價十五錢 郵稅一錢
- 江戶の華 上、中、下全三冊 一冊定價十五錢 郵稅一錢
- 明治火災消防圖會 全一冊 定價三十錢 郵稅一錢
- 明治各地災害圖會 上、下 全二冊 一冊定價二十錢 郵稅一錢
- 日清戰爭圖會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 臺灣征討圖會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 支那戰爭圖會 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 西本願寺葬式圖會 上、中、下全三冊 一冊定價二十錢 郵稅一錢

- 東京總說並内廊之部 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 神田橋 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 日赤坂 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 芝布 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 赤坂 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 四谷 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 小谷 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 本郷 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢

新撰東京名所圖會

- 上野公園 上、下 全二冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 淺草公園 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 芝公園 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 麴町、愛宕、清水谷公園 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 深川公園 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 湯島、根津、白山、王子、高田公園 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 隅田川堤 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢

- 東京總說並内廊之部 全一冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 神田橋 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 日赤坂 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 芝布 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 赤坂 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 四谷 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 小谷 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢
- 本郷 上、中、下 全三冊 定價十五錢 郵稅一錢

日本風俗史

文學博士藤岡作太郎、平出聖次郎先生合著

上、中、下全三冊定價上編金八十五錢 郵稅十二錢 中編金一四十八錢 同 二十錢 下編金一四十八錢 同 二十錢

○上編 自太古 至源平時代 ○中下編 自鎌倉時代 至江戸時代

本書ハ我國社會ノ發達風俗ノ變遷ヲ詳述シタルモノニテ國家ノ組織實情ノ狀體宗教ヨリ迷信ニ教育ヨリ人情ニ至リ衣食住ノ俗冠婚葬祭ノ式年中ノ行事歌舞遊戯ノ風等社會ニ顯レタル現象ハ網羅シテ遺スコトナク期ヲ別チ章ヲ吹メ叙スルニ流麗ノ筆ヲ以テシ文ノ表シ難キ所精密ナル畫ヲ以テ之ヲ補フ

江戸三十六城門畫帖

寫真石版 彩色摺

說明附全一冊定價和文金一圓六十錢 歐文金二圓 各小包二百枚

徳川氏覇府ヲ江戸ニ開ケヤ城廓ヲ固ムルニ三十六門ヲ以テス其ノ嚴肅ナル追想スルニ餘リアリ今時存スルモノ僅カニ三四ニ過ギズ本帖ハ當時ノ實況ヲ詳カニ寫シタルモノ之ヲ編カバ轉々三十餘年ノ昔ニ遊ベルノ思アラシ

發行所 東京神田區通新石町 東陽堂

風俗畫報賣所

京橋區尾張町	東海堂	日本橋區住吉町	至誠堂
神田區表神保町	東京堂	大阪東梅田町	盛文館
日本橋區吳服町	會社北隆館	京都寺町二條南	會社芸艸堂
京橋區錦屋町	良明堂	京都佛光寺通烏丸東	三共社
麻布區永坂町	旭堂	高知市種崎町	澤本駒吉
本郷區元富士町	盛春堂	名古屋市中區	淺見文昌堂
神田區神保町	上田屋書店	信濃國上諏訪町	宮坂書店
本郷區元富士町	北中書店	鹿兒島市仲町	吉田幸兵衛
越後國新津市	日光社	羽後國増田町	東海堂
越後國長岡表四ノ町	黒十郎	下總國水海道	新々堂
越後國新發田	齋藤治吉		

發行所

東京市神田區通新石町三番地 東陽堂支店

著作權

發行所 吾妻健三郎 編輯人 橋本繁

料告廣	注意	表價定	冊數	定價	郵稅	合計	
●回数多の多少により一切割引なし	●本誌は都て前金にて御注文の外送本せず○御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す○本誌代價は皆替にて御送の節は神田郵便支局へ振込ること○賣捌店にて賣切の節は直接發售堂へ御注文あるべし○郵券代用は一律一錢の切手に限る	一冊 金十五錢	二冊 金三十錢	三冊 金四十五錢	四冊 金六十錢	五冊 金七十五錢	六冊 金九十錢
●一回の多少により一切割引なし		金二十圓	金二十五圓	金三十圓	金三十五圓	金四十圓	

明治二十二年三月一日第一號發行 明治四十年十月廿五日第三百七十三號發行